
反逆の勇者と道具袋

ストック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

叛逆の勇者と道具袋

【Nコード】

N3978X

【作者名】

ストック

【あらすじ】

前の勇者が集めた金銀財宝や装備品を、いきなり奪われて魔王討伐の旅をしらだつて？手元に残ったのは道具袋のみ。これでどうやれっというんだよ……。

一般人からまったく成長しないでいきなり魔王の前に立たされる勇者。使えるのは道具袋のみです。

召喚

あれ・・・？ここはどこだ？

目が覚めたら、いつのまにか知らない部屋だった。

おかしい。

いつものように自分の部屋で寝ていたのに。

寝ぼけた頭で現状確認する。

俺は菅井真一。17歳。

両親と妹の4人暮らし。ごくごく平凡な高校二年生。

15歳の妹晴美はアイドルとして大人気ブレイク中。ここだけが一般と違うとこだが、俺は何の能力もないし。

しかし、ここはどこだ？

俺の部屋はこんなに広くないし豪華でもない。

ベットなんか天蓋つきのキングサイズだし。

考え込んでいたら、ドアが開いて白いドレスを着た美少女と、メイド服を着た少女が入ってきた。

「お寝覚めになりましたか？ 初めてお目にかかります。勇者様」
満面の笑みで話しかけてきた。

「勇者様？」

「はい。貴方様は、この世界を救う運命の勇者様。私は貴方に忠誠をささげます。申し遅れました。私はこのフリージア王国第四王女、メルトと申します。貴方様のようなすばらしい方を召喚できて誇りに思います」

「フリージア王国？第四王女？そんな国聞いた事もないけど？」

「はい。それは当然です。異世界から魔力が強く、勇者として才能がある方を召喚させていただきました。失礼ですが、この袋を開けていただけませんか？」

メルトは薄汚れた巾着袋を差し出す。ちよつと持ち歩けるくらいの大きさが、中には何も入っていないそうにない。

「何も入っていないみたいだが・・・うわー!」

袋を開けたとたん、空中に魔方陣が浮かび上がった。

「おお・・・やはり勇者様。その勇者の袋は主と認めた者にしかその中身を取り出せないようになっております。その魔方陣に手を入れて、勇者にふさわしい装備を取り出すよう念じて見てください」

言われるままに念じてみる。すると、金色のフルプレートがでて、真一の体に装着された。

「なんだか夢を見ているようだな・・・いや、これはきつと夢だ。寝よう」

現実逃避をしてベッドにもぐりこもつとしたが、鎧が邪魔で苦しい。

「ねえ、この鎧なんかならないの？重くて邪魔なんだけど」

「あつ。はい。すぐ外させていただきます。ミル、お願い」

側に控えていたミルと呼ばれた少女の手を借りて鎧を脱ぐ。

「あの・・・勇者様。お手数ですが、アルを全額と念じて袋から出てくるか試していただけませんか？」

「アル？まあいいけど。それじゃ」再び魔方陣に手を突っ込んで触れたものを取り出してみる。

次の瞬間、金貨で部屋が埋め尽くされた。

「すばらしいです。これでわが国も救われます。次はですね・・・さまざまな名前を挙げて取り出すことを要求される。言われるがままに従う真一。

鋭く輝く剣・きらびやかな鎧・美しい宝石・金銀財宝が出てくる。

途中から真一も面白くなり、何が出てくるか期待するようになった。

数時間ほどそうして、やっと終了した。

なにか体から力が抜けていくようで、相当疲労していた。

「お疲れ様でした。それでは明日、父である国王陛下と謁見していただきます。今日はごゆっくりお休みください」

メルトの指図で豪華な料理が運ばれる。美しい侍女が給仕をする。しきりに恐縮していたが、優しくいなされ、酒と料理を堪能してしまった。

食事の後は侍女達と広い風呂に入り、ぐっすりと眠った。

謁見室

「メルト、勇者の様子はどうか」玉座から威厳のある声で問われた。「はい。ヘラート陛下。今日のところは歓待させましたから、今はいい気持ちで寝ておりますわ」

メルトがこの国の王であるヘラート四世に返答する。その顔は嘲る様に笑っていた。

「ふふふ。先祖が魔王を倒して用済みになった勇者を始末したはいものの、あの道具袋の封印が勇者にしか解けないとはな。おかげで勇者が世界中から集めた伝説の武器防具や金銀財宝もとりだせぬままだ。これでは今の世に再び現れた魔王に対抗できぬ。どうしたものかと思っていたが」

「勇者召喚術を習得して再び勇者召喚するのは骨がおれましたわ。兄や姉は頼りになりませんし」

「メルト。数日かけて袋の中身を取り出させたら、しばらく鍛えて魔王討伐に向かわせる。きちんと処置をしてな。くくく。」

「わかりました。」

二人で顔を見合わせて笑う。真一はそんな事も知らずに眠っていた。

謁見

次の日、メルトが呼びに来て、王様と謁見することになった。

「何か緊張するな」

元の世界では王様どころか、市長ですら会った事はない。

「大丈夫ですよ。シンイチ様はわが国の救世主さまですから。」
メルトが優しく手を引いて案内した。

謁見室は広間になっていて、壇上に玉座がある。

周囲には沢山の紳士淑女がいた。この国の貴族たちらしい。

玉座には堂々とした態度の中年男性が座っている。

メルトはその男性の前まで真一を連れて、膝を付く。真一もそれにならった。

「そなたが勇者シンイチか。余は皇国フリージアの王ヘラート4世じゃ。この度はよく我が娘メルトの召喚に答え、わが国に来た。勇者として存分に尽くすがいい」

人の上にたち命令しなれた口調でいう

「菅井真一ともうします。まず、事情を教えてください。勇者とは一体何をすればいいのでしょうか」

緊張して震えそうになる声を抑えて問いかける。

「わが国は北方に魔国といわれる魔族が支配する国に接してある。魔族によりわが国の民が何人も不当に害されておる。その魔王は放つて置けばこの世界を破壊しかねない存在であり、唯一対抗できるのは異世界にいる勇者の資質を持ったもののみじゃ。その為に召喚した。歴代の勇者は見事期待に応え、魔王を滅ぼし世の中を救ったのじゃ」

「今までに何回もそういったことがあったのですか？」

「そうじゃ。魔王は今までに何度も倒されている。勇者ならきつとできる」

煽るように王が言う。周りの紳士淑女からも拍手が巻き起こる。

「シンイチ様ならきつとできますわ。メルトは信じております」
頬を染めて言うメルト。

「はは、メルトも勇者様を信じているようじゃな。期待しておるぞ。それでは勇者の証として、勇者の冠を授ける」

王は玉座をたち、跪いているシンイチの頭に金で出来た輪をかぶせる。そうすると自動で輪が縮まり、ジャストサイズになった。

「こ、これは・・・」

「勇者としての能力を引き出し、頭を守る聖具じゃ。役目を果たしたら自動で外れる」

「ま、待つてください。まだ俺は引き受けると決めただけじゃ・・・」

「シンイチ様。ぜひとも私達をお助けください。私達は貴方にすぎるしかないのです。その冠は貴方様を守るもの。決して邪魔にはならないはずです」

「だ、だけど、いきなり嵌めるなんて・・・」

「勇者殿！」王に強い視線を向けられる。周りの貴族からも強制するよ様な視線を向けられる

「は・・・はい。わかりました」シンイチは観念したように受け入れた。

「では、勇者シンイチの誕生と魔王討伐の旅の出発を祝って、乾杯」
大広間に移動して、パーティが始まる。

王族と貴族達にはこやかにシンイチに話しかけてくる

「勇者様のこれからの旅がお健やかでありますように」

「勇者様、期待しています。ぜひ魔王を倒して我等をお救いください」

身勝手な期待がかかる。

シンイチは段々腹が立ってきた。

(なんなんだよ・・・人に勝手に魔王を倒せなんて期待して、自分達はその間パーティーでお楽しみか?)

メルトが近づき、話しかけてきた

「勇者様、皆が期待しております。笑って安心させてやってください」

「そうはいつでも・・・」

「皆が貴方をお慕いしていますわ。もちろん私も」

シンイチの手を取るメルト

「え・・・?あ、いや・・・」

「さ、ダンスをおどりましょう。私がリードいたしますわ」

顔を真っ赤にするシンイチ。今まで彼女などできた事はない。絶世の美少女に手を取られて照れている

(単純な男。まあ途中でのたれ死ぬでしょうが、万一魔王を倒して帰ってきたら、当然世界中の財宝も集めてくるでしょうから、取り上げて暗殺すればいいわ。それまではこうやってあやしておきましよう)

腹の中でシンイチをみくだしながら、メルトはシンイチとダンスを踊っていった。

仲間

ダンスが終わると、メルトからパーティーのメンバーになる予定の者を紹介された。

「勇者殿よろしく。私はアーシャ・カストールという者。皇軍獅子騎士団副長を務めている」

金髪碧眼の美形の青年が挨拶する。20代前半くらいで、がっしりとした引き締った体つきをしている。

「よ、よろしく願います」

シンイチは握手する。どう見ても向こうの方が勇者っぽい。

「アーシャ殿はカストール伯爵家の次男で、皇国で最も強い騎士と名声が高いのです」

メルトが説明する。その目は憧れの人をみるように潤んでいた。

「いや、私など勇者殿の足元にも及びません。ですが、皇国のため、メルト様のため、必ず魔王を打ち倒してまいります」

アーシャはメルトの目を見て言った。

「期待しております・・アーシャ」

空気のようになるシンイチ。

「こほん・・それでボクの紹介もしてくれるかな？メルト姉さま」

振り返ると、中学生くらいの可愛い顔立ちをした少女が立っていた。

「あら、失礼しました。この子は私の腹違いの妹で、メアリーと申します。こう見えて、国一番の魔法使いになる素質があるそうですわ」

「よろしくね、勇者さん」

「よろしく願います・・でも、王女が魔王討伐の旅に同行するのですか？それもこんな子供が・・」

シンイチはいぶかる。

「子供っていうな。あんたも子供じゃん」

「まあまあ。実は、メアリーは公的には王族としては認められていないのです。彼女は王の庶子の上、身分の低い平民出身なので・・・」
「別にいいけどね」

ふてくされたようにそっぽを向く。

「じゃ、これからよろしく」そういい捨てる、さっさと離れていった。

「・・・仲が悪いの？」おそろおそろシンイチが聞く。

「別に仲が悪いわけではありませんよ。普段はあまり接する事はありません。平民の母を持ちながら魔力が強いおかげでなんとか王宮に残れているような子ですからね」

冷たく笑うメルト。

シンイチその姿を見て、先ほどのダンスで高まった想いが少しずつ醒めていった。

「メルト姫さま、私も紹介をお願いします」

少ししてから、同じ年くらいの伶俐そうな少年から声をかけられた。

「これはノーマン神官。シンイチ様、彼が最後のメンバーで、回復魔法の使い手です」

「よろしく。」値踏みするような視線を向けてくる。

「・・・よろしくお願いします」握手するシンイチ。

何か虫の好かない奴のような気がした。

「勇者様はそれぞれのメンバーから戦闘の手ほどきを受けたあと、魔王討伐の旅に出発していただきます」

一方的に言うメルト。

シンイチはわけもわからないまま、とんでもない事に巻き込まれていく気がしてきた。

「す・・・すこし外の空気を吸ってきます」

逃げるようにその場を離れるシンイチ。メルト達三人が冷たい目で

見送った。

王宮のベランダ

「はあく。なんでこんな事になったのかな？てか、魔王討伐なんて軍の仕事だろ？なんで勇者とその仲間に任せるんだよ」

一人で愚痴をこぼす。

「まあ、それに関してはボクも同意見だけどね。しょうがない訳もあるんだよ」

後ろから可愛い声で話しかけられた。あわてて振り向くと、さつき紹介されたメアリーが立っていた。

「あ、メアリーさん。いえ、ただの独り言ですから焦って言い訳するシンイチ

「気にしなくていいよ。メアリーでいい。ボクもシンイチと呼ぶから。敬語も不要」

「わかった。それじゃメアリー、改めてよろしく」

「ん。これ飲む？」ワインが入ったグラスを渡してくる。

「ねえ、さつきの訳って？何で軍隊で戦争しないの？」

「魔法の存在が大きいよね。広域魔法を相手に使われたら、レベルが低い兵士はすぐ全滅。レベルが高くて魔法耐性を持つ個人の力に戦争は依存するの。雑魚が何万人でかかって、一人の個人の方が強い」

シンイチは無言で考える

（巨砲主義と遊撃艦主義の永遠のテーマみたいだな。今のところ、個人の力で軍を敗れるくらい力が違うって事か）

「・・・でも、俺は戦いの経験もないシロウトだよ？」

「そんなの知らないよ。姉さまの勇者召喚魔法は勇者として資質を持つものを選択して召喚する魔法だけど、何百年も前の失われた魔法を調べて、わかるところを断片的に繋ぎ合わせてやっと作り上げた魔法だもん。そこまで都合のいい事ができるか。勇者の財宝袋が反応したみたいだから、全くの失敗じゃないとおもっただけどね

「。伝説の勇者みたいにすごい能力があるとは限らないし。現にこ
う話していても、魔力量が一般人程度しか感じられないし」

「マジで・・・？そんな無責任な・・・」

「まあ、がんばりなよ。ボクも正直気が進まないんだけどね。お母
さんが死んで何か国に貢献しないと、王宮にもいられなくなっちゃ
うから参加するんだよ。自分の事で手一杯」

そういうと、メアリーは会場に戻っていった。

「マジかよ・・・」

後には呆然とするシンイチが残された。

修行

それでは、今日から戦闘について修行していただきます。

パーティの次の日、メルトとアーシャが部屋に入ってきて言った。

「今日から兵士用の宿舎に移ってもらおうぞ。鍛えねばならんからな。すぐに支度しろ」

「ハイ・・・」

シンイチは逆らえるはずもなく、着替えを道具袋に入れて部屋を出た。

「遅い！！！！。なんだそのザマは。もつと真面目に走れ」アーシャ

「ハア・・・ハア。無理です」シンイチ

最初に基礎体力を見るといわれて、兵士用のグラウンドを走らせる。シンイチはごく一般的な現代の高校生で、中世の一般人とくらべても大きく体力が劣る

「話にならないな・・・それでも勇者か！！情けない」

10周ほど全力で走らされた。アーシャは汗もかいてない。他の兵士達も平然としている。

シンイチは疲労でへたりこんでいた。

「おいおい・・・あんなので勇者？大丈夫かよ」

「貴族のお坊ちゃんでももう少しマシだぜ」

「だらしねーなwなんか俺でも余裕でかてるんじゃないかね？」

兵士達の間で嘲りの声が上がった

(しょうがないじゃん。俺は文明人の一般人だぜ。野蛮人のプロの兵士に体力勝負で勝てるか！！)

心の中で叫ぶシンイチ

「まったく・ほら立て！！次は剣術だ。」木剣を投げてよこすア
ーシャ

ようやく息を整えて、木剣を掴んでたつシンイチ。

「相手は・・・そうだな。新兵ということで、ホライゾン。相手をして
みる」

「は・・・はい」

立ち上がったのは背の低い少年兵士。シンイチよりも華奢にみえる
「よかったな勇者様。さすがにアイツには勝てるだろ。まだ12歳
の新兵だからな」

「ホライゾン。俺たちが鍛えてやったんだ。負けたら承知しないか
らな」

周りからヤジがとぶ。

「開始！！」

木剣での勝負が始まった

（授業で剣道をしたことがあるが、防具をつけずにやるのなんて初
めてだ。でも相手は子供だし・・・なんとかなるか）

「面！！」

シンイチは木剣を上段から振り下ろし、打ち込んだ。

次の瞬間、いきなり足に激痛がはしり、もんどり打って倒れた。

ホライゾンと呼ばれた少年兵士が、脛に思い切り打ち込んだきたの
である

地面をころげまわるシンイチ。周囲は爆笑の渦

「あいつ馬鹿か？普通足を狙ってくるのは常識だろ？わざわざ足を
止めて振りかぶるなんて何かんがえてんだ？」

「勇者様は俺たちの予想も付かないようなすごい技をみせてくれる
予定だったのさ！！」

兵士は好き放題にいいつもの

「勝者。ホライゾン。まったく、これが勇者なのか？こんなド素人

をつれて魔法討伐とは・・・もういい！！さがっている」

治療室に運ばれるシンイチ。

アーシャはこれからの事を思ってたため息をついた。

治療室にて

「いてて・・・やっぱり無理だよ。俺今まで戦いなんかした事ないもの」

治療室のベッドでぼやくシンイチ

「おかしいですね。勇者様は剣の才能もあるはずですし、その聖具は勇者としての能力も引き出してくれるのですが」

治療室に來たメルトが言う

「なあ、やっぱり俺には無理だとおもう。元の世界に返してくれないか？」

「それが、魔王を倒すまで、返送魔法が作動しないんです。私達も勇者様の希望はかなえてあげたいんですが・・・」

すまなそうな顔をするメルト

「でも、魔法の才能はきつとありますよ。気落ちなさらなくてくださいね」

優しくシンイチの手を握る。

「・・・メアリーは俺の魔法量は一般人並だっていつてたけど？」

ジト目でみるシンイチ

「いえ、あの、勇者でも最初は一般人と変わらないんです。戦いの経験をつんで、魔物が死ぬ時に落とす魔法玉を食べていけば、自然に魔法量は増えていきます」

「レベルアップか。そうだといいいんだけど・・・」

「さあ、気を取り直して、魔法の修行をしましょう。メアリーのお師匠様でもある宮廷魔術士フォンケル様が、午後から授業してくれます予定です」

「わかったよ・・・」

昼食後、魔術師フォンケルの修行を受けたが、そこでも問題が発生した。

魔術

「字が読めない・・じゃと?」

白いひげのいかにも魔術師といった風貌の老人がいう

「はい・・読めません」シンイチ

分厚い魔術書を開いても、書いている字は読めない

「そんな・・勇者召喚術には、言葉や文字の知識を植えつけるといった機能もあつたのですが・・」メルト

「ふむ。我々が作り出した勇者召喚術は、失われた魔法技術の模倣じゃからの。完璧に再現するのは無理だったのじゃな」

首を振って諦めたようにいう宮廷魔術師フォンケル。

「しかし、どうするかろう。魔法とは概念じゃから、文字が読めないと話にならないぞ」

「少しずつ勉強していけば・・」シンイチ

「しかし、細かな概念まで理解するのにどれだけかかるか。このままでは魔法の習得に何年もかかりそうですね」

メルトが考え込む。

「わかりました。勇者様の役割は皆と相談しなければなりませんね。それでは、話してきますわ」

さっさと出て行く。後はポカンとした顔のシンイチが残された。

「す・・すいません。なんか一瞬で文字を習得するような魔法はないんですか?なんかこのままではマズい気がします」

シンイチはフォンケルに取りすがった。

「ふむ・・無いこともないがな。これがその魔道書じゃ」奥の本棚から薄い本を取り出す

「あ、ありがとうございます。早速使ってみますね」

「これ、待ちなさい。この本を使って文字解析魔法を習得しようとするれば、魔力量12000を消費するのじゃぞ。今のお前さんは魔

力量15じゃ。魔力量をおぎなうために魔力玉を使うにしても、一体どれだけ集めればいいのか。スライムだと10万匹以上倒さないといかない」

「そんなに・・・」

「だからその本は誰にも使われないのじゃ。文字を覚えるだけなら時間をかければなんとかなるからな」

「それじゃ、どうすれば」

「こればかりはワシものう。まあ、その本はあげるから、持っておきなさい」

「はい・・・」道具袋にしまう。そのままとぼとぼと部屋に戻った。

会議室

「・・・というわけで、勇者には戦闘の才能も、魔法を習得する事もできない事がわかりました」

メルトがシンイチについて説明する。

出席者はメルト・国王・宰相・勇者メンバーパーティの一同。

「ふむ・・・結局できる事は、財宝袋への収納と取り出しのみか。なんとも情けない」

宰相が首をふる。肥満した中年男だが、眼光は鋭い。

「まあわが国の国民でもないからのたれ死んでも構わんがな。どうせ魔王の脅威もこの国まで来るには時間がある。勇者に匹敵するような猛者は何人もいるし、前回の勇者の装備や魔法具も手に入った」
国王が言う

「私も見たところ、戦士としては役に立ちませんね。せいぜい荷物運びといったところでしょうか？」

アーシャが笑う。

「しかし、文字が読めないとはね」ノーマンがあざ笑う。

「みんな、ちょっと酷くないかな？勇者を呼んだのはボクたちの勝手なんだし、能力が無いならわざわざ魔王討伐の旅なんか連れて

行かなくても・・・」メアリーがシンイチに同情して言う。

「だが、考えてみれば、魔王の脅威にさらされている国々や、前回の魔王討伐時に結ばれている「勇者協力条約」に加盟している国にとつては、勇者の看板を出す事で協力してもらえるだろう。これからの旅を通じて各国秘蔵の装備や財宝を提供するよう呼びかける予定だからな」

「ふふ。勇者の名前を出せば、各国から好きなだけ財貨を引き出せますし、冒険者ギルドも逆らえませんか。わが国が世界の支配者となるには、魔王討伐を名目で各国に影響をもたらさないと」

「しかし、魔王に対してはどうするかな。まさか本気で討伐するわけにもいかんし、そもそも無意味だ。魔王を倒しても次の魔王が生まれるだけだし、無用にわが国に敵意をもたらすだけだしな」国王。「一つ提案があるのですが、魔国に使者を出してみれば？」ノーマンが言う。

「使者を出すのはかまわんが、どうするのだ？」宰相

「それはですね・・・」

ノーマンが魔王に対しての提案を説明する

「なるほど。それならば、魔王に対して恩も売れる」国王

「ふふ、異世界の小僧には気の毒な事だがな」アーシャ

「みんな、いくらなんでもひどすぎるよ。ボク、シンイチに言うてくる」

席を立とうとするメアリー

「お黙りなさい。卑しくも王の血を引く娘ならば、国のことを第一に考えなさい」

メルトがピシヤリという

「でも・・・」

「メアリーや。お前の優しい気持ちは嬉しいが、あの小僧一人犠牲にすれば、世界中の人間が助かるのじゃ。我々は1人を犠牲にして残りの99人を助ける決断を下さないといけない立場。それば王族

というものじゃ。この旅が終われば、お前も第五王女として正式に認められる。死んだお前の母もその事を望んでいたじゃろう？」

「・・・わかりました。お父様」メアリー

「ではこれで方針は決定じゃ。大丈夫だとは思うが、勇者にはこのことを気づかれてはならんぞ」

全員が頷く。

その様な会議も知らずに、シンイチは治療室でうなっていた。

使者

「しかし、勇者のこの体たらくでは、各国を回って旅などおぼつかないのでは？」

宰相が言う

「確かに、それぞれの国を攻めている魔族を倒せなどと言われては、真っ先に死んでしまいそうだ。そうならば、先に各国の不信感を招きかねん。」

国王の言葉に全員が考えこむ。

もともと、魔国と接している国は大陸全土ではフリージア皇国だけだった。

しかし、魔族は空を飛んで攻撃できるので、もともと強国であるフリージア皇国を直接襲うのをさけ、周辺の弱国を直接襲い国土を占領して一定のコロニーを築いている現状だった。

補給の問題で魔族のコロニーはすぐには拡大しないが、各国にとつては国土が侵されているので頭がいたい問題だった。

「その辺のことを踏まえて魔国と交渉すべきでしょうな。魔国に対しては妥協を、周辺国については支配を。」宰相

「我々が一致団結して本気で戦おうとすると、まず戦場になるのはわが国。そんな迷惑をこうむる必要はないでしょう」「ノーマン

「では、周辺国に対しては勇者を召喚した事を触れ回り、魔王討伐をすると宣伝して各国所有の国宝級の装備や軍資金の提供を命令。そして魔国に対しては、現在の魔族コロニーを各国に自治区として承認させるかわりにこれ以上の拡大を自粛するように交渉しましょう。もちろん勇者を交渉の材料にして「メルト」。

「決まりだな。では、各国に対して使者をだす。」

国王の採決により、方針は決定され、各国に使者が向かった。

魔国 魔王城にて

「フリージア皇国の使者殿か。よく参られた」

魔王アンブロジアが玉座から話す。

魔族といってもそれほど人と変わりない姿をしていて、耳が長く黒い翼がついているところが特徴である。ただし、魔力は人間よりはるかに高い。

「魔王陛下におかれてはご機嫌うるわしく。わが国と誠実な友好関係をいつも王は感謝しております」

使者が発言する。

実は、魔国とフリージア皇国は平和条約を結んでおり、かなり大規模に貿易もしていた。

「ふむ。しかし、最近わが国との友好に傷をつける噂があつてな。

おぞましき勇者を貴国が召喚したとか」

魔王がプレッシャーをかける。

魔国にとって、数百年前に魔王を倒した勇者は悪の元凶そのものとして伝えられていた。

「相変わらず耳が早い。しかし、それは決して貴国に対して不誠実な行為ではないのです」

使者も負けずに自信を持って話す。

「ほう。面白い。では、どういった理由で召喚したのかな？」アンブロジア

「はい、説明させていただきます。

？前勇者が道具袋にしまいっぱなしになっていた伝説の装備や金銀財宝を回収するため。

？最近、周辺国がフリージア皇国に対して不満を持っている。勇者

を召喚して盟主国としての権威を取り戻すため。

この二点のために勇者を召喚いたしました。召喚した勇者を魔王討伐の為に宣伝するのは周辺諸国に影響を及ぼすため、本気で魔国に対して敵対するつもりはありません」
使者は説明を終える。

「しかし、魔国にとっては不快なだけだが。それに対してどう補償するのかな？」

「はい。貴国に対しては――――」

「ふむ。それが本当なら、我等にとっても勇者召喚はメリットがあるな。」

「術式と現物は必ずお届けさせていただきます。そして、今後は永遠に両国の平和を」

「言葉だけでは信用ならんな。『呪力条約』を結べるか？」

『呪力条約』とは、国同士の条約を結ぶ時に使われる魔法である。どちらかが条約を破った場合、即座にやぶった方の条約主といわれる対象者が呪いを受けて死亡する。

その効力は双方の条約主が死ぬ時まで有効になる。

「わが国ではヘラート陛下を含む王族全員が条約主になる予定です」

「ふむ・・なるほど。こちら側は余を条約主に求める気だな」

「はい。それだけ我々は誠実でありたいのです」

「わかった。では呪力条約紙を与えよう。王族全員の署名をしてこちらにもってこい。使者の目の前で私が署名しよう」

「ありがとうございます。これで勇者がもたらした忌まわしき過去の過ちも償われ、魔族と人間の永遠の平和がもたらされましょう」

「期待しよう」

魔王と使者の会談は満足のうちに終了した。

森の国 ミールにて

「なんと！わが国の国宝『森の杖』を差し出せと？あれを作り出すのに何人の神官が命を削ったか貴国はわかっているのか？」

ミール国王が怒鳴る

「存じております。300人ほどが命をこめて寿命を縮めたとか
使者が平然という

「確かにわが国にも魔族が襲来しておる。だが、大した規模でもないし、被害も些少だ」

「『勇者協力条約』をお忘れか？勇者に対して最大限に協力するという呪力条約。数百年前に結ばれた条約とはいえ、各国の王が即位する時に引き継ぐはず」

「ぐ……だが」

「それと、100万アルの提供をお願いします」

「無理だ……国家予算に匹敵する額など。そもそも、勇者の支援にそこまで必要ないはず」

「やれやれ……まるでわかっていらつしやらないご様子。わが国が盾となつて魔国と接しているから、危機意識が薄いのですね。魔王が死んだ後も魔族は存在するのです。わが国に上空を通過する魔族を撃退する設備をつくるとか、魔国に妥協を求めするための根回しの費用とか……わが国がそれをしなければ、いつまでも魔族の襲来は続きますよ」

「ぐっ……」

「一ヶ月後に条約締結式です。ぜひご出席を。費用のほうは国債でかまいませんが、『森の杖』は本物をお持ちください」

意気揚々と使者は帰る。その後姿をミール国王は睨みつけていた。

フリージア皇国

「くくく・光の国ミラーからは光の兜と200万アル。海の国アトルチスは海皇の槍と250万アル。大地の国ガイルからは地獄熱の杖と300万アル。その他の国も国宝と資金の提供をしてきた。これでわが国は大陸の覇者となるであろうな」

国王が笑う。

「私には『輝きのドレス』をください。これを着てアーシャさまと・メルト

「ふふ。わかっておる。すべて終わった後は十分に報いよう。ふふふ」

王族の親子は顔を見合わせて笑った。

出発

勇者召喚から一ヶ月。

今日は各国の王も招いての華々しい式典が開かれていた。

勇者が魔王討伐の旅に出るのを祝う式である。

同時に勇者協力条約が数百年ぶりに発効され、各国の間に同盟が結ばれた。

「本日はこのような式典を開き、誠に喜ばしく思います。私、フリージア皇国第四皇女が魔王を倒す救世主を招いた結果、非の打ち所のない立派な勇者を召喚できました。彼ならば魔族の脅威におびえる私達をすくってくれるでしょう。ご紹介します。勇者シンイチ様です！！」

民衆の間から歓声がわきあがる。

フリージア城前の広場に作られたきらびやかな壇上の上にシンイチが姿をあらわす。

まるで王族がきるような豪華な服を着せられているが、その表情は硬い。

「勇者様！！！我等をお救いください」

「魔物に殺された息子の仇を！！」

「私の娘は魔族にさらわれました。今頃は奴隷として・・・お願いします。娘をお救いください！！」

勇者を一目見ようと、他国からも民衆が押し寄せていた。

「はい。必ず魔王を倒し、この世を救います」

シンイチが言うと、再び歓声があがった。

シンイチは内心で恐怖に震えていた。

無責任な期待と崇拜は本人にはプレッシャーになるものである。

教えられた簡単な台詞を言うのが精一杯だった

(なんなんだよ・俺には無理だよ。救世主でも勇者でもないよ)しかし、ここで勇者のふりでもしないと、容赦なく見捨てられるであろう予測はこの一ヶ月でついた。

ちやほやされていたのは最初だけで、最近では城内の誰からにも馬鹿にされる始末。

寝る場所や食事も一般兵と同じ待遇で、さんざん馬鹿にされ苛められていた。

一ヶ月訓練しても、最下級兵士にも勝てなかったのでそうだったが。

よく見ると、フリージア皇国の兵士・役人・貴族たちは道化者を見る目であざ笑っている。

勇者パーティのメンバーであるアーシャ・ノーマンも同様だった。仲間として認めてもらえず、面と向かって飾りだけの勇者、荷物もちだたと馬鹿にされた。

メルトも最初の頃の態度と違って、冷たく接するようになっていた。「貴方は勇者としてただそこにいてくれるだけで結構です。下手に戦闘などなされぬように」

戦闘の才能もなく魔法も習得できないとわかった後、メルトからかけられた言葉である。

シンイチはすっかり孤独になっていた。

メアリーはシンイチを馬鹿にはしなかったが、できるだけ無視するようにしていた。

シンイチに対して同情していたが、親しくなると見捨てる時に辛くなる父王から言われていたからである

(・・ごめんね。私達が正しいとは言えないけど、これで平和になるんだよ)

「それでは他のパーティメンバーもご紹介します。フリージア王国最強の騎士、アーシャ・カストール様！」

メルトの紹介で壇上から手をふるアーシャ。

若い女性から勇者に向けられる以上の歓声があがる

「神に仕える敬虔なる信徒、ノーマン神官!!」

「そして、我が王室からは、第五王女メアリー・フリージア!!」
王室からも参加するということで、民衆の興奮は頂点に達した。

各国の王は表面上は笑顔を浮かべていたが、内心では腸が煮えくりかえっていた。

(忌々しい。頼みもしないのに召喚されおつて。勇者など不要だ)

(これでは魔物の被害よりも、勇者によって巻き上げられたせいで国が傾いてしまう)

(たとえ魔王が滅ぼされたとして、勇者の力が我が国に害を及ぼす可能性もある。どうしたものか・・・)

シンイチも、各国の王の鋭い視線に気がついており、理不尽に憎しみを向けられておびえていた。

「さあ、勇者一行の出発です。皆様、盛大にお見送りしましょう」
メルト。

民衆の歓声の中、勇者パーティが馬車にのりこむ。

勇者一行を乗せた立派な馬車は、フリージア皇都を出て、北の魔国に向かっていた。

その裏では、魔国との「呪力条約」が締結されていた。

「ふむ。フリージアからの提供は、勇者の道具袋の返還か。あれはもともと先代魔王が開発した魔国の国宝。勇者に奪われ、専用化魔法をかけられたので勇者以外に使えなかったが、フリージアが開発

した道具袋の所有権譲渡魔法式と一緒にこちらに返還するということだ。現所有者であるシンイチとやらの命と引き換えに余に所有権が渡されるか・・くくく。結構な事だ」
魔王アンブロジアが条約の内容を確認する。

「はい。勇者シンイチの身柄と共にお渡しいたします。そして魔国側はフリージア国への友好条約と貿易の継続。そして同盟国の魔族コロニーを自治区とする代わりに、現コロニーのこれ以上の拡大をしないでいただきたい。あとは以前要求された人質を一人送るということですが・・」フリージア使者

「ふふ。よかるう。それでよい。この条件で署名しよう」

魔王アンブロジアがフリージア皇国王族の署名をされた呪力条約紙に血をたらし、署名する。

「ありがとうございます。これで両国の平和が永続いたします」
フリージア皇国からの使者は深く頭を下げ、感謝して帰っていった。

馬車

ゴトゴトと音を立てて馬車が行く。

周りは騎士隊によって固められている。

先頭の馬車にはアイーシャとノーマン。

次の馬車にはシンイチとメアリーが乗っていた。

シンイチは何度かメアリーに話しかけたが、冷たく無視されている。馬車の中は気まずい雰囲気だ漂っていた。

そのうちに会話を諦めて、この一ヶ月のことを思い返してみた。

「まったく、話にならん。馬にもまともに乗れないのか」

アイーシャに乗馬の訓練を受けたが、まったく乗りこなせない。当たり前だが日本の観光地で乗るような馬ではなく軍用馬なので気性が荒く、何度も振り下ろされて傷だらけになった。

「遅い！！剣くらいまともに振れるようになってほしいものだ！！」
木剣でめったうちにされ、気絶するシンイチ。

そのうちにアイーシャは相手もしなくなり、部下の兵士に訓練を丸投げするようになった。

「ほらほら、勇者様。俺たちが相手させていただきますよ」

そうになると、兵士から集団でいたぶられるようになる。彼らは勇者に対しての嫉妬を感じていたが、それを叩きのめすことができる自分達の強さに酔っていた。

「勇者様、掃除と洗濯もお願いしますね」

最後には、最年少のホライゾンからも容赦なく雑用を申し付けられ

るようになり、ただ耐えるのみだった。

剣の才能がないことは思い知っていたので、一刻も早く文字を覚えて魔法を習得しようとした。

しかし、既に勇者の才能は見限られているので、誰も教えてもらえない。

メアリーやフォンケルにも頼んだが、忙しいと断られるだけだった。自分で勉強しようにも、辞典の一つもない状態では不可能。

結局何もできないまま、一ヶ月がすぎさった。

たまに、王宮内で王族や貴族の子弟からかわれる事もある。

「おい、アイツが余にも珍しい無能勇者だぞ」

第一王子カリグラが取り巻きの貴族にそういつてシンイチをからかう。

第一王子の癖に政治に携わる事もなく遊びほうけている彼にとっては、シンイチはいい玩具だったのだろう。

取り巻きの貴族も嗜虐心をそそられてあざ笑った。

「アイツが本当の勇者かどうか確かめてやろうぜ。ファイヤボール」
酔った勢いでカリグラがシンイチに対して炎の魔法を放った。

「あぐっ」

避けられずに背中に大火傷をおうシンイチ。

「ストーンスパア」「アイスカッター」

調子に乗って魔法をぶつけようとする取り巻きの貴族達。

「アースウォール」シンイチに魔法が当たる寸前、土の壁が出て、シンイチを守った。

「お兄様。そして皆様方。すこしお酒を召し上がりすぎですよ」
土の魔法をつかって助けたメルトが諫める。

「おお、可愛いメルト。冗談だよ。なあ、みんな」

周囲の貴族も同調する。

「もちろんご冗談ですわ。彼には魔王を倒すという使命がありますもの。お体は大切なもの。シンイチ様、お部屋で休まれては？」

「は・はいわかりました」

ほうほうの体でその場を逃げ出すシンイチ。後から王子と貴族達の笑い声が聞こえた。

このように、この一ヶ月は屈辱の連続だった。

（なんでなんだよ・なんで何も出来ない俺が勇者扱いされるんだよ・魔王なんか倒せるわけないよ）

毎日夜になるとその様に考えて眠れなくなる。

そして、いつ魔王討伐の旅に連れ出されるかおびえていた。

いろいろ試して、結局シンイチに出来ることは道具袋の使用だけだった。

道具袋を開けたら出現する魔方陣に手を突っ込んで念じると、該当した中の物が出た。

入れるときは反対側の手で物に触れて念じると収納された。

収納無制限で、持ち運びも重さを感じないので、それなりに貴重な物だというのはわかる。

だがしかし、できる事はまさに荷物運びだけなのだ。

（ふふ・確かに勇者じゃないな。荷物運びだ）自嘲するシンイチ。

考えるのを止めて馬車をみる。

なぜかシンイチが乗っている馬車は護衛で固めてあった。

（まてよ・何かおかしくないか？旅をして魔物を倒しながら強くなっていくんじゃないのか？護衛されながらじゃ一回も戦闘経験を積むことなく魔王の前についてしまうぞ？いったいどういうことなんだ？これじゃただ単に魔国に護送されているみたいだぞ）

少しずつ、少しずつおかしな点に気がつきはじめのシンイチ。

どんどんと不安が大きくなっていった。

魔街

フリージア皇国首都から出発して4日、一行は国境をこえた。ここまでの旅の間、魔物は一度も現れず、全く戦闘はなかった。それどころか、旅をする商人風の間人や、魔族の姿も見られたが、皆おとなしく一行に道をゆずって見送るだけだった。

その様子を見て、シンイチの違和感は頂点に達した。

（おかしい・絶対におかしい。だいたい、なんで魔物が襲ってこないんだよ。こっちは勇者一行ですって宣伝しているようなもんだろ？周りに騎士隊に囲まれて旅にでる勇者なんているわけない！！）

「おい、メアリー。教えてくれよ。これは本当に魔王討伐の旅なのか？」

馬車の中で何度も聞くが、答えはいつも同じだった。

「うるさいなあ。そうに決まっているでしょ。ボクは疲れているんだよ。話しかけないでよ」

そういつて無視を貫く。

野営の時も、アーシャやノーマンはシンイチを全く相手にせず、騎士隊の隊員と談笑してまったく緊張感がなかった。

そうしているうち、最初の魔国の街ナムールについた。

街は魔族やコボルト族、ドワーフ族、エルフ族など雑多な民族で溢れていたが、人間の姿も結構見かけられた。皆物珍しそうに勇者一行と騎士隊を見る

（おい！！こっちは敵国の軍だろ？なんで騒いだりしないんだよ！！）

シンイチの不安がドンドン大きくなっていった。

「よし。この後は半分は自由行動。残り半分は勇者の護衛につけ」
街で一番大きな宿屋に到着後、アーシャが命令し、騎士隊の半分は街に繰り出していった。

「勇者様は姿を見られると騒ぎになりますから、宿にいてください」
屈強な騎士に両脇を挟まれて、粗末な部屋に連行されるシンイチ。
そのままずっと監禁されていた。

料理亭「魔王の舌」ではフリージア国の騎士隊が大騒ぎしていた。
この数日の行軍でたまったストレスを発散している。

アーシャやノーマンも両脇に美しい魔族の娘をはべらかしていた。

「今日は無礼講だ。皆よく働いてくれている。魔王城まであと数日かかるが、ここで英気を養ってくれ」

アーシャの号令で乾杯する騎士達。

美味しい料理や美しい女達に堪能していた。

店の隅で暗い顔をして料理を食べているメアリー。

「メアリー様。暗い顔をされて、どうされましたか？」

ノーマンが話しかけてきた。

「別に・・・」

「勇者に同情されているのでしょうか。メアリー様はお優しいですか
らな」

皮肉な口調で言う。

「別に優しいわけじゃないよ。でもさ、関係ない人を生贄に出して、
それで平和になったからってどこか歪んでいるよ。そんな事してたら
絶対手痛いしっぺ返しがかかると思うよ」

「ほうほう・・・例えば？」

「例えば、勇者の怒りをかって仕返しされるとか」

「あはは・・・あのような最弱の荷物もちに何ができるとでも？」
ノーマンが笑い転げる。

「わからない。何もできないかもしれない。でも、こんな事続けていたら、何時か何処かで『何かできる人』に対して裏切りをして、こっちが酷い目にあう日がきつと来るよ」

「ははは、メアリー様の忠告、必ず国王陛下にお伝えいたしましたしよ
う」

そういうと、ノーマンは離れていった。

(・・・別にアンタなんか伝えてもらわなくても、帰ったら必ずお父様に言っつて、こんな事は今回限りにするように言わないと)

割り切れない思いを抱えながら、一人でワインを飲むうち、いつしか眠りに落ちていった。

「ふふふ・・・平民王女様は心配性らしい」アーシャが笑う。

「第五王女様などに心配されなくても、フリージア皇国は安泰ですね。ふふ。まあ、一応陛下にはお伝えさせていただきますよ。ご本人様はお伝えできないでしょうからね・・・」

「ははは・・・」

腹に一物ありげな表情で、二人は飲み交わしていった。

ナムールに二日滞在し、すっかり英気を養った騎士隊は出発した。その間シンイチは一室に監禁されたままで、食事の時点でさえ部屋から出されなかった。

もはや、シンイチはこの一行が魔王討伐を目的しているとは信じられなかった。

相変わらず、メアリーと二人きりの馬車の仲。

シンイチは堪えきれずに何度も話しかけていた。

「なあ。本当に魔法討伐の一行なんだろうな」

「・・・そうだよ」

「このまま魔王城に乗り付けるのか？」

「・・・うん」

「なんでいきなりそんな事になるんだよ」

「・・・魔王が直接の戦いで勝負をつけようと言ったので」

「え？」

「前も言ったけど、軍を出して戦争するより、代表者の戦いで勝負をつけるの。そのほうが余計な被害がないでしょ？」

「そりゃそうだけど・・・」

「・・・大丈夫。実際に戦うのは私達だから」

苦しそうに顔を背けて言うメアリー。

納得はいかなかったが、一応訳を聞いて、シンイチはすこし落ち着くことができた

到着

ナムールの街を出て数日後、ついに一行は魔王城についた。漆黒の巨大な城で、数キロにわたる城壁に囲われている。近づくにつれてシンイチは恐怖に震えた。

（だ・大丈夫だ。俺は戦わないんだ。他の三人がきつと魔王を倒してくれる）

必死に呪文のように心の中で唱える。そうしないと恐怖で発狂しそ
うだった。

そして、そんなシンイチを痛ましそうに見つめるメアリーにも、予想もしなかった運命が待っていた。

魔王城の正面から近づくと、巨大な白馬に乗った巨人を先頭にした魔族の騎士隊が近づいてきた。

「勇者ご一行様、ようこそいらつしゃいました。私、16魔将の一人ケルビムがお迎えに上がりました」

「おお、ケルビム殿。お久しぶりです。息災であらせましたか？」
アーシャが親しそうに挨拶する。

「はは、魔将としてこき使われておりますよ。再びお会いできて嬉しく思います」

二人はがっしりと握手をする。

その様子を見てシンイチは心臓が飛び出るほど驚いた。

「な・なんで敵国の将軍と・・・」

「・・・アーシャ様は昨年の親善大使として魔国に赴いた際に彼と戦った事があって、引き分けたそうよ。それ以来友人なんだって」メ

アリー

「・・・魔族と友人？おい！！本当に魔王を討伐にきたんだろっな？」

シンイチがメアリーの肩を掴んで揺さぶる。メアリーは切なそうに視線を下に向ける。

そうしているうちに一行は魔王城の正面門から入っていった。

魔王城の城壁内に、何千人もの魔族の姿があった。

全員整然と隊列を組んでいる。

「これは！！」シンイチ

「みごとな軍ですな」アーシャ

「はは、勇者と魔王様の戦いを見るために、我が軍の精鋭が集まったのですよ。数百年前の雪辱を注ぐ姿をみせたかったのですね」ケルビムが誇らしそうに言う。

シンイチはその中の一人にだって勝てそうになかった。

魔王城正門から入り数キロいったところで、巨大な神殿のような建物があつた、その入り口で馬車は止まる。

そこで一行は降りた。

不安そうに周囲を見渡すシンイチ。周囲を騎士が取り囲む。

その時、周囲に屈強な兵士を引き連れた巨人の姿があつた。

シンイチでもわかるくらいに圧倒的な魔力と強大な力が伝わってくる。

「皆のもの、ご苦勞であつた。よく勇者と人質を護送してきてくれた。」

「はい。魔王アンプロジア陛下。勇者と人質の引渡しをさせていただきます」

アーシャが言うと同時に、シンイチとメアリーが拘束される。

すぐさま、魔王がメアリーに首輪を付ける。

「な！！！！どういうことだよ。今からお前達が魔王と戦うんじゃないのか！！」

「黙れ」

魔王が軽くこづくくと、シンイチはあっけなく気絶した。

「シンイチ！！！！ボクも拘束するということは、最初から人質に差し出すつもりだったんだな！！」

「ふふ・魔王様から王族を一人差し出すように言われましたのでね。急遽貴方様を第五王女として擁立したのですよ」ノーマン

「まあ、当方としては王の血を引いて魔力が高ければそれでよい。よい子が生めそうだし」

「！！！！！！大地の極熱よ。沸きあがれ。ボルケーノ」

メアリーが持つている杖を振って攻撃しようとするが、魔法が出ない

「ああ、地獄熱の杖ならば、すり替えさせていただきました。人質には勿体ないですからね。その杖はそこらの安物ですよ。そんな魔法どころか、小さい火一つ起せそうもありませんね」

ノーマンがあざ笑う。

「・・・くっ」

メアリーが観念したようにへたりこむ。

「二人を地下牢にでも入れておけ」

魔王に従う兵士が連れて行った。

「これが道具袋でございます」

シンイチから取り上げた道具袋を魔王に献上するアーシャ。

「ふふ。間違いなく『魔王の袋』だ。ついに余の手に戻ったか」

感極まったように道具袋をなでまわす。

「よくぞ取り戻してくれた。所有権譲渡の儀式は明日執り行つが、見物していかれるかな？」

「いえ、我々はすぐに呪力条約紙をお届けして、国王陛下を安心さ

せたいのでこのまま帰ります」

「ふふ。せっかちな。良いだろう。これが条約紙だ。確かに渡し
たぞ」魔王

「確かに受け取りました。これで過去の過ちも償われ、人間と魔族
の間も平和が保たれます」

「我等も過去の勇者の非道を完全に水に流そう。両国に未永く平和
を」

アーシャとアンブロジアが堅く握手をする。

そのまま騎士隊とともに帰っていった。

懺悔

地下牢にて

「ううん・・・ここは？」

シンイチが気がつくくと、暖かい枕の感触があった。目の前に泣きはらしたようなメアリーの顔がある。

シンイチはメアリーに膝枕されていた

「うわ！！」

あわてて起き上がるシンイチ。

その姿をなきながら見たメアリーは、静かに頭を下げた。

「ごめん・・・本当にごめん。」

少し落ち着くと、先ほどの記憶がよみがえった。

「お前・・・知っていたんだな。魔王討伐なんて嘘っぱちで、俺を生贄にすることを」

メアリーは頭を下げたまま、「うん」と答えた。

「なぜだ。なぜわざわざ俺を召喚して、わざわざ魔王の生贄にするんだ??？」

激しく責め立てるシンイチ

メアリーは静かに理由を話し出した

「そんな・・・道具袋を魔王に返すため、それだけのために・・・」

「道具袋の持ち主は本来は魔王なんだ。前回の勇者が道具袋を奪って、勇者にしか使えなくした。その所有者を他人に譲渡する魔法式は先に完成してただけで、肝心の所有者である勇者がいなかったんで、わざわざ召喚したんだよ」

「最初からそのために？」

「ううん。召喚した勇者がすごい能力の持ち主だったら、それはそれで魔王や他国を攻める道具として使う予定だったみたい。シンイ

チが弱いから、各国から勇者支援の名目で国宝や資金を巻き上げた後に魔王に対しての生贄にしようってことになったみたい」

「てめえ・・・人が弱いからって、何様のつもりだ」

「ごめん・・・王様ってそういう立場だって。国を豊かにするために手を汚すべきだって・・・」

「ふざけるな！！！」

怒りのあまり、メアリーをビンタするシンイチ。

メアリーは殴られても泣きながら頭を下げ続けた。

「ごめん・・・いくら殴ってもいいよ。この身を好きにしてもいい。

それだけの事をしたんだから」

じっと耐えるメアリー。

その姿を見て、幾分怒りを静めるシンイチ。

「・・・でも、結局てめえも裏切られて、人質にされたんだな。間抜けな話だ」

あざ笑うシンイチ。

「うん。そうだよな。馬鹿だよな。好きなだけ笑ってよ。自分でも馬鹿だとおもっ」

乾いた笑みをこぼすメアリー

「・・・」

「王族は100人のうち、1人を犠牲にして99人を助ける役目だつて。この件が終わったら、第五王女として正式に認めるから、国のことを考えなさいって。そんな偉そうな事言われて納得しちゃうて、犠牲にされる二人目にされたんだから。馬鹿としかいいようがないよ」

「・・・メアリー。なんでそんなに王族になりたかったんだ」

「決まっているよ。王族になれなかったら、どの道一生道具にされつづけるからだよ！！！！！！」

泣きながら平民を母に持つ庶子がたどる運命を話し出した。

各国の王家は、代々巨大な魔力を受け継ぐ。

それは優性遺伝であり、生まれた子供は正妻の子でも庶子でも強い魔力を持つ。

だから、王は貴族・平民問わず自分の気に入った女を取り上げ、ハーレムを作った。

いや、ハーレムに入れられる女はまだマシで、そのまま捨てられる女の方が多いのである。

当然、何十人もの庶子が生まれた。

王の血を継ぐとはいえ、平民を母に持つ庶子の人生は過酷である。

正式に王族として認められる者は少ない。

魔力が強い男は軍隊に入れられ、一生使い潰された。

魔力が強い女は貴族に下賜され、妾として一生日陰の身になった。

魔力が比較的弱い者は、多額の上納金と引き換えに富裕な平民の家に押し付けられた。ただの奴隷として。

例外的に魔力が強く、美しく、国に貢献できた者だけが王族として認められる。

メアリーの母は運良くハーレムに入れられたが、体が弱かったために数年前に病死していた。

「メアリー。貴方は美しく、魔力が強い。必ず王族として認められるよう努力しなさい」

平民出身のためハーレムの中でも疎まれ、病死した母の最期の言葉だった。

その言葉に従い、王族として認められるため、必死に魔力を鍛えた。

「王族としてみとめられたら、妾にも奴隷にもならずにすむし、比較的的自由になれると思っただよ。そしていつか立派な貴族のお嫁さんになって、穏やかに暮らせると思っただよ。」

「その結果が人質として魔王の物か・・・」
シンイチがポツリというと、メアリーは号泣した。

（怒っても仕方ない。この子だって俺と同じように裏切られて生贄にされたんだ。中学生くらいの年齢で、頼りにする親もない子が必死に生きるためにした事なんだ。考えてみたら、魔王の奴隷なんて俺よりもかわいそうだ・・・）

そう思ったシンイチは、泣き伏しているメアリーに近づいて、ゆっくりと頭をなでた。

「シンイチ？」

「もういい。もう泣くなよ。悪いのはお前じゃなくて他の王族だ。お前は仕方なかったんだよ」

「・・・許してくれるの？」

「・・・同じ裏切られた者を責めても仕方ないだろう。もういいよ」

「ありがとう。ごめん」

「もういいから」

メアリーを抱きしめて頭をなでる。シンイチの胸の中でメアリーは泣き続けた。

しばらくしてから、メアリーは泣き止んだ。

「シンイチの胸、あったかい。」ぽつりと言う

「そ、そうか」

「ありがとう。最後に人を好きになれてよかったよ」

「す、好き？」

「うん。好き。ねえ、お願いしていい？」

「お願い？」

「・・・ボクを殺して欲しいの」

「な？」

「ボクに付けられた『奴隷の首輪』は自殺しようとする意識を止めるんだ。だから・・・」

「イヤだ」

「お願い」

「イヤだ!!! 必ず助けるから!! 勇者である俺を信じる。お前だけの勇者になって、必ず魔王を倒してやるから」

「シンイチ・・・」

シンイチに抱きついて泣き出すメアリー。疲れきっていたのだろう。すぐに眠りに落ちた。

「なにか方法があるはずだ。俺が魔王を上回っている所、俺にできて魔王にできない事。考えろ、考えろ・・・」

今まで読んだあらゆる物語を必死に思い出して、なんとか魔王に勝つ方法を考える。

夜は静かにふけていった。

次の日、兵士に地下牢から引き出され、魔王城の広場につれていかれた。

広場には魔方阵が書かれ、中央に道具袋が置いてあった。

「ただいまより、愚かなる勇者から魔国の至宝である『魔王の袋』を取り戻す儀式を始める」

魔王が高らかに宣言すると、広場を埋め尽くした魔王軍から歓声が沸き起こった。

「火と破壊の魔公イフリート 魔王に忠誠を」筋骨たくましい男の
魔族

「水と癒しの魔公ウンディーネ 魔王に忠誠を」絶世の美女の魔族

「風と滅びの魔公シルフィード 魔王に忠誠を」小柄な少女の魔族

「地と恵みの魔公ノーム 魔王に忠誠を」見上げるような

巨体の魔族

「16 魔将を代表して騎士ケルビム 魔王に忠誠を」騎士ケルビム

と15人の魔族が唱和する。

それらを見ながら、シンイチは必死に考えていた。昨日一晩中考えても思いつかない。

だが、なぜかどこかに抜け道があるような気がしていた。

「ふふふ・・勇者シンイチとやら。膝が震えているぞ。我が父を倒した勇者とは比べ物にならない。何か言いたい事があれば聞いてやるぞ」

魔王アンブロジアがあざ笑う。

（考える・・考える。そうだ！！なんでこんなに軍隊で取り囲まれているんだ。俺が弱いことを知っているはずなのに）

「ふつ。これは武者震いだ！！なにせ、我一人を倒すため、これだけの軍勢を用意しないとイケない卑怯で懦弱な魔王など、我にかなうはずもないからな」

一世一代の演技を必死にする。

「シンイチ！！！！」その姿をみて、メアリーが気でも狂ったのかと心配になる。

その言葉を聞いて、魔王は一瞬キョトンとし、次の瞬間爆笑した。周囲の魔族も大笑いをする

「何がおかしい！！！」

「いや、すまんすまん。シンイチだったか？余をここまで笑わせてくれたのはお前が初めてだ。褒美に、永遠にその名が伝わるよう歴史に残してやる。魔王を笑わせた勇者としてな」

「なんだと！！！」

「ふふ。冥土の土産に教えてやろう。ここにいる全軍はお前を警戒して集めたのではない。これから人間を攻めるために集めたのだ」

「・・・というと？」

「つまり、余がお前の命をとり、『魔王の袋』の所有者となる。そうして、この全軍を袋の中に入れ、余が運んで人間の国を攻める」

「！！！！！！！」

「ふふふ。今まで補給の問題で攻められなかった各国を蹂躪してやる。『現在の魔族コロニーの拡大』をする事は条約違反だが、『新たに魔族のコロニーを作る事』は条約違反にはならないからな」

「卑怯者！！！！！」メアリーが叫ぶ

「ふふ。フリージア皇国とは平和条約を結んでいるので攻められぬが、周辺国すべてを平定してしまえば、結局は属国も同然。有利な貿易でじわじわと絞り上げ、今の王族が寿命で死ぬと同時に平定すればよい」

その声を聞いて、魔族の軍が歓声を上げる

「魔王様 万歳！！！！」 「世界の征服を！！」

メアリーは絶望のあまり涙を流した。

魔王の話聞きながら、シンイチはある物語を思い出した。

それは神の手にも負えない魔神を騙す人間の青年の話。

(これしか方法がない・・・)

シンイチは魔王に近づき、土下座をした

「ん？なんのまねだ」

「先ほどの暴言、本当に申し訳ありません。ぼくは貴方の部下になります。許してください」

そのままジリジリと道具袋に近づく

「ははは、なんだその姿は。まあ、人間として身の程を弁えたといふべきだが、残念だな。お前の命がどうしても必要なのだ。そうでなければ、その無様な様子に免じて奴隷にしてやってもよかったが」

「そんな事を言わないで。魔王様！！！！」

みっともなく土下座を続ける。

「シンイチ・・・いや、当然だよ。責められないよ」メアリーは幻滅しながらも、仕方ないと思っただ。

「どうしても？」

「どうしてもだ！！」

「では、こうさせていただけます」

「なに????」

シンイチは土下座をしたまま、道具袋の魔方陣に片手を突っ込んだ。その瞬間、シンイチの姿がかき消えた。

収納

魔王城

シンイチが道具袋に手を突っ込んだ瞬間、その姿が消えた。道具袋もなくなっている。

「なんだと！！瞬間移動の魔法を身につけていたか。さすが腐っても勇者。しかし、この魔王城には結界が張ってある。逃げられるとでも？皆、全員で勇者をさがせ！！」

魔王の命令で、全員が魔王城を隅々まで探す。

「ふふ。残念だったな。あの勇者は一人で逃げ出す卑怯者らしい。まあ、逃げられるわけもないがな」

魔王がメアリーを言葉で罵る

「シンイチ・いや、シンイチだけでも逃げてくれれば・・・」
メアリーが独り言を言う。

すると、いきなりその姿が消えた

「なに！！！！」

驚愕する魔王

「人質も逃げた。探せ！！！！」

魔王が吼える。いつの間にか余裕が失われていた。

「ま・魔王様 大変です！！」兵士があわてた様子で報告する
「なんだ！！！！！！！！」

「魔王城の他ににもありません！！！！」

「何もないとはいどういうことだ！！！！」

「説明できません。こちらに来てください！！」

兵士の後続く魔王。城壁の正門から外を見る。

門の向こうには・・・どこまでも続くなにもない白い空間が広がっていた。

あるところに、とてつもなく強力な魔神がいました。

その将来の力に恐怖した神は、幼い魔神を捕らえて、ちいさな小瓶にいれました

覚えておけ この瓶のふたが取れた時こそ、世界のすべてを滅ぼしてやる

月日は流れ、魔神は瓶の中で、神をもしのぐ力を身につけました。

そうして、偶然にその小瓶を見つけた青年に言いました。

「この瓶のふたを開ければ、どんな願いもかなえてやる。この魔神の名にかけて誓約する」

青年はその言葉を聞くと、瓶のふたを開けました。

「ふははは。確かにお前の願いをかなえてやる。その後、この世界を滅ぼしてやる」

「それでは、僕を死なせないでください」

「よかる」

「外にいたら巻き込まれるので。僕を小瓶に入れてください」

「よかるう」

「そしてその小瓶を壊されたら死ぬので、壊さないでください」

「よかるう」

「あと、食料がないと死ぬので、全世界の食料も」

「よかるう」

「空気がないと死ぬので、全世界の空気も」

「……よかるう」

「あ、太陽の光がないと死ぬので、太陽も」

「……よかるう」

「もちろん地面がないと死ぬので、全世界の地面も」

「……よかるう」

「でも一人では寂しいな。多分孤独に耐えられず自殺するな。全世界の人々も」

「……いい加減にせぬか」

「でも、最初の『僕を死なせない』為には必要なことですよ。あと・」

延々と続く青年の要求

.....

「もういい!!! わかった。ぜんぶいれてやる」

その言葉を実行した瞬間、世界のすべての存在が小瓶の中に入った。後は世界の外側で一人呆然とする魔神がとりのこされ、何一つ壊せないままにおわりましたとき。

「あ、あれ?ここはどこ???」

いきなり目の前の光景が変わってびっくりするメアリー。

目の前には、広く平坦な更地があり、そばにはシンイチが立っていた。

「メアリー、大丈夫?」シンイチが声をかける。

「シンイチ。すごい!!! いつの間に瞬間移動なんて超高等魔法を使えるようになったの?」

助かったと思い、シンイチに抱きつくメアリー。

「瞬間移動?そんな魔法使えないよ。ここはさっきの場所から一歩も動いてないよ」

得意げな顔をしてシンイチが言う。

「????どういうこと??」

「いやー。俺には俺にしかできない力があつたってこと。剣でも魔法でもないね」

「え?それって?」

「道具袋を使える事。あと、俺の世界の物語の知識。笑っちゃよね。子供の頃読んだシュールな小説と、魔王の言葉にヒントがあつたよ」

「どういうことなの？じらさないで教えてよ!!」

「まず、魔王は全軍を袋に入れようとしてたね」

「うん」

「四魔公とか16魔将とかいう強そうな人と何千人の兵士も入れられるよね。強さとか量とか大きさとか関係なく無制限に」

「うん」

「んで、俺の道具袋は、片手を突っ込んで『収納』と念じたら、反対側の手に触れている物を収納できるよね」

「まさか」

「はい。入れちゃいました。反対側の手に触れている『魔王城』を。その中に魔王も魔族も全部入っているよね」

しーん

しばらく二人の間に冷たい風が吹いた。

「入れたの？」

「入れた」

「・・・魔王も？」

「魔王も」

「・・・魔公も魔将も兵士も？」

「魔公も魔将も兵士も」

「・・・あのでっかい魔王城も？」

「魔王城ごとぜーんぶ」

「ぶっ」

「くくっ」

殺害（前書き）

今回はちょっとグロ入ります

殺害

「あははははははは　もうだめ。笑いしんじょう」
涙が出るほど笑う二人。

「ははは。もうこれで心配ないよ」

「シンイチは本物の勇者だね!!」

二人ともこれほど爽快な気分になったのは初めてだった。

「さてと・・・それじゃ」

シンイチが立ち上がったとき、いきなり袋が動いた

「な・・・なに?????」

二人で顔を見合わせる

まるで中で何かが暴れているような動きだった。

「もつとだ、もつと魔力を集める」

魔王を中心にして、周囲を魔族が取り囲んでいた。

「魔獄砲」

手を挙げて魔力を放出する魔王。

「ぐっ・・・足りぬ。もつと魔力を余に集める」

四大魔王・十六魔将・数千人の兵士の魔力を集めても立っていられる姿は、魔王の威厳に満ちていた。

水の魔公ウンディーネと地の魔公ノームが必死に体を癒す。今にも魔力のオーバーフローでバラバラになりそうなくらい傷ついていた。

「もうおやめください。これ以上は・・・」ウンディーネが必死に諫める

「・・・余にはすべての魔族の命がかかっておる。命果てようとも、この世界を破ってみせる」

鬼気迫る形相で魔獄砲を放ち続ける魔王。

山でも軽々と吹き飛ばす魔力砲を何発も放ち続け、道具袋の世界を破ろうとしていた。

激しくよじれる道具袋

「ど……どうしよう。このままじゃ破れて、魔王がでちゃうよ
！……！」

メアリーが悲鳴を上げる

「えっと、えっと、そうだ……！」

シンイチは必死の表情で道具袋の魔方陣に手を突っ込み、何かを力まかせに引き抜いた。

【ブチッ】

その直後、魔方陣からこの世のものとも思えない叫び声がひびき、メアリーが耳を抑えてへたりこんだ。

シンイチが気持ち悪そうに、手に握り締めたものを捨てる。

「ね……ねえ。聞きたくないけど、なにをしたの？」

「と……とつさに。魔王の心臓を取り出した」

「……」

「……」

「……ねえ」

「……はい」

「鬼？」

「鬼ですハイ。」

「魔王様――――――――――」

！……！

ウンディーネとノームが叫ぶ。全魔族の魔力を使って、必死に瀕死の魔王の体を治療する。

「許さん……許さんぞ勇者どもめ。八つ裂きにしてやる」

他の魔族の憎悪が魔王城を包む。

「まだ魔王は死んでないみたいだね」

少しして落ち着いたメアリーがいう。

「わかるの？」

「この『奴隷の首輪』の魔力が消えてないから。主人が死んだら外れるの」

「そうか・・・中途半端はよくないな。魔王キツチリ殺そう」

「どうするの」

「心臓抜いても生きていられる化け物だったら、確実なところは一つだけだよ」

「ききたくない」

「後ろ向いてて」

道具袋に手をつ突っ込んで、何かを一つまみ取り出して捨てる。

【ニユル】

「聞きたくないけど、何取り出したのかな？残酷勇者さま」

「ひどい！！ 魔王の脳みその真ん中辺りを一つまみ」

「・・・外道。ボクの勇者様は、魔王より怖いよね」

「そんなあ」

カランと音を立てて、奴隷の首輪が外れた。

「・・・魔王様は息をひきとられました・・・」

ノームの声に、全魔族が堪えきれずに泣き出していった。

「・・・どうやら、落ち着いたみたいだね」メアリー。

「ああ。魔王が死んだし、中から破ろうとするのは止めたみたいだ」
シンイチ

「これからどうする？」

「とりあえず、フリージア皇国まで帰ろうか。あいつ等にはお礼をしないといけないからな」

「・・・そうだね。お仕置きしよう。」

二人で手を繋いで、フリージア皇国へと続く道を歩き出した

魔法玉

「・・・そういえば、おなかすいたね」

歩き始めて二時間くらいたって、メアリーが訴える。

「そうだよな。考えてみたら、今日は朝から何も食べてないしなあ」
シンイチ

「そうだ!!。その道具の中には、魔王城が入っているんだよね」

「ああ。てかそう考えたら気持ち悪いな。魔族を何千人とぶら下げて歩いてるんだから」

「魔族だけじゃなくて、食べ物も入っているはずだよな。お城だもん」

「そうだな。出てくるか試してみよう」

魔王城にて。

魔王が死んだからといって、食堂の仕事がなくなるわけではない。

何千人もの魔族の食事を作るため、24時間体勢で料理を作っている

何千皿もの料理。その中でも魔王や魔将向けに作られた特別な料理があるが、いきなり消えた。

「あれ?おかしいな。ここの料理を運ぶはずだったのに、なくなっている。」

新米の料理人が首をかしげる。

「おい!!!どこやったんだ!!!」

「いや、確かにそこにあっただんですよ」

「現にないじゃねえか。てめえ、食いやがったな!!!」

先輩のコックに殴られる不幸な新米料理人だった。

外にて

「おいしい〜。さすが魔王城の料理!!!」メアリー

「上等な料理でろくなんて注文つけたけど、ちゃんと答えてくれるとは、なんとという性能！」

道具袋に頬擦りするシンイチ。見た目は小汚い袋だが、どんな伝説の宝物より価値があると感じていた。

ワインも取り出して、道の真ん中で宴会状態。二人は満腹になるまで食べまくっていた。

再び魔王城

4 魔公と16 魔将が円卓につく。中央には虹色に光る巨大な魔法玉があった。

魔法玉とは魔物が死んだ時に死体の側に出現する魔力の塊で、冒険者はそれを回収して売って収入にする。または、自分で吸収すると魔力量の増大させることができた。他にも、魔法を使う際に魔力補助をするなどに使えた。

しかし、強大な魔物の魔法玉には、別な使い道もあった。

「・・・この『魔王の魔法玉』を吸収した者が次の魔王となります」
水の魔公ウンディーネが発言する。

「この中で前魔王について魔力が強いのは、ウンディーネ魔公ですが・・・」
地の魔公ノームが発言する。

「だが、ウンディーネ魔公は戦闘向きではない。今なすべき事は、一刻も早くこの世界から脱出することではないか？少々の魔力の強さに関わらず、戦闘に長けた者が次の魔王になるべきではないか？余にまかせてほしい」

炎の魔公イフリートが言う。彼が一番戦闘能力が高かった。

「あはは。その前に、この中の空気を浄化し続けていかないと。私

に魔法玉をくれなきゃ、いつまでも魔力がもたないよ。いいとこ保つて一ヶ月だね」

少女のような姿をした風の魔公シルフィードが発言する。

「その前に脱出すべきだ！！！！」イフリート
睨みあう二人。

「お二人とも、冷静になっていただきたい。そもそも、魔王の魔法玉とは、歴代の魔王の魔法を伝える至宝。魔王が世襲制であることをお忘れか？魔王の血を引く正当後継者に渡されるべきものです」
魔将ケルビムが二人を牽制する。

「控えていただきたいケルビム将。如何に魔将といえども、公爵同士の討論に割り込むべきではない」イフリート

「いえ、ここはあえて言わせていただきます。数多い魔王の子の中で、たった一人魔将の地位まで上りつめた、私こそが魔王の正当後継者としてふさわしいはず。父の後を継ぎ、魔王玉を吸収させていただきます」

「その通りです！！！」残りの15将が唱和する。

魔王の地位は世襲制ではあるが、寿命が長いため、正当後継者を指名するのに時間がかかる。

その間、血で血を洗うような魔王後継者争いに勝つためには、実力を示さないといけない。

四大魔公に告ぐ魔将の地位に上り詰めたケルビムは、明らかに魔王の後継者としての実力があつた。

お互いに睨みあう。円卓での会議は混沌とした雰囲気にも包まれた。

(ダメだ……魔王が死んで、このような世界に閉じ込められたのに、誰もが権力闘争を始めた。このような争いをしている場合ではないのに)

魔族の中で最も知性と理性に優れているウンディーネがため息をついた。

再び外

「あつ 大事な事忘れてたよ」メアリー

「何？」

「魔族が死んだら、魔法玉つて物を残すんだよ。それが高く売れたり、魔力の元になったり、レベルアップに使えたりするんだよ」

「そういや、フォンケルの爺さんもそんな事いつてたっけ。」

「きつと魔王が死んだから、魔法玉でたはずだよ。取り出して！」

「はいはい」

シンイチは魔王の魔法玉でろくと念じながら道具袋に手を突っ込んだ。

「うお！！！でっかいし綺麗だ。」

目の前に巨大な虹色をした魔法玉が出現した。

「・・・こんな大きい魔法玉なんて見たことないよ。それにこの魔力。すごすぎる」

メアリーが呆れたように言う。

「それでどうする？」

「えっとね、こうやって手を触れて、『吸収』と念じれば、自然に吸収できるんだけど。二人で分けようよ」

二人同時に手を魔法玉に触れる

「うわ！！！すごい魔力が流れ込んでくる」メアリー

「?????なにも感じないけど???'シンイチ

魔法玉はすごいスピードで小さくなり、魔力がメアリーに吸収される。

「あれ？なんで私だけ？」メアリーが首をかしげる。

「よくわかんないけど、俺が魔力を吸収する能力すらないって事だけは分かったよ・・・」

地面に座り込んで落ち込むシンイチ。

「ま、まあまあ。シンイチには無敵の道具袋があるじゃない。それに、魔法についてはボクが全部役に立ってあげるから」
ポンポンと肩を叩いて慰めるメアリー。

「せっかくこの本が使えると思ったのにな・・・」
道具袋から文字解析魔法が書かれた本を出してため息をつく。

魔王城

魔王の位を主張しあう者同士が激しく言い争う中、いきなり魔王の魔法玉が消えた

「！！！！！！これは?????」

「どうやら・・・外の勇者に取り出されたようだ・・・」

一瞬呆然とする一同

「だ、だから早く余に託せばよかったのだ!!」イフリート

「何を言う。身の程を弁えろ!!」ケルビム

「あーあ。これでもうお終いだね。キャハハ。みんなのせいだよ」

シルフィールド

お互いに責任を擦り付け合う魔族たち。

(これで・・・魔族は終わりだ。情けない。どうすればよかったのだ)
ウンディーネとノームは頭を抱えて懊悩した。

不穩（前書き）

ついにランキングに乗りました。読んでいただけの皆様に感謝！！

サービスで今日は3話更新します

不穩

外

「大丈夫だよ。さっきの魔法玉は特別性だったみたいで、いくつかの魔法も入ってたから。その中に『知識共有』の魔法があったから、今からボクの知識をコピーするからね。すぐ文字を覚えられるよ」「そういつて接近してくるメアリー」

「ち、ちよつとメアリー。近いよ」

「この魔法はおでこをくつつけないと使えないんだよ。そのままじつとしてて」

無邪気におでこをくつつけるメアリー。抱きついてくる。

シンイチはドキドキする。が、何もおこらない

「・・・え?」

「あ、ごめん。そういえば、ちゃんとした杖がないと魔法使えないんだった。」「メアリー」

「そうなの?」

「うん。魔法を使うには、魔力もそうだけど杖も必要だからね。という事だから、杖も出して」

「なんか、既に出てくる事が前提になっているよね」

そついいながら道具袋に手を突っ込む

「ちゃんとすごい伝説の杖を呼び出してよ」

「そんな事いわれてもな。えつと、魔王城内で一番すごい杖でろ」

魔王城

「え???」

ウンディーネが驚く。

長年愛用して、今も左手に握り締めていた杖が、いきなり消えたか

らである。

「ま、まさか、私の杖も外の勇者が取り出したの？。これでは、今の私達は瓶の中のアリに等しい。どうすれば・・・いや・・・これを利用すれば・・・」
何か思いついて考え込む。

外

シンイチが取り出した杖をみて、メアリーが大喜びする

「シンイチ、すごいよ！！『女神の杖』だよ！！！！」

「そんなにすごいのか？」

「伝説の勇者のパーティの魔法使いが使ってた杖で、彼女が魔王城で死んだ時に失われた伝説の杖だよ！！」

「ふーん」

「なんかリアクション薄いなあ。これ、確実に国宝クラスだよ。売れば100万アルは堅いよ。」

「どうせ俺には使えないし・・・」

「もう。拗ねないの。それじゃ改めて・・・」

シンイチに抱きついておでこをくつつけて、「知識共有」の魔法を使った。

「痛！！！！！！」

「もうちよつとだから我慢して」メアリーががちり抱きついてはなさない。

平原にシンイチの悲鳴が響き渡った。

「うう・・・酷い目にあつたよ」シンイチがぼやく

「よしよし、よくがんばったね」メアリーが頭をなでる。

「ん・・・まあ、これで文字も覚えられたし、いいか」

座り込んで休むシンイチ

「ちょっと座ってて。ヒール」

メアリーが癒しの魔法を使う。シンイチの頭痛が消えた。

「魔法って便利だなあ」

「そうでしょ。」

「俺もつかえるようになるかな？」

「うーん。シンイチの魔力量は15だからね。使えてもライトの魔法一回分くらいかな？魔法玉吸収ができないからレベルアップも無理だし」

「魔王を倒しても最弱のままの勇者っていったい・・・」
地面に「の」の字を書いて落ち込むシンイチ。

「へへん。ただでさえ危ないシンイチにはそれくらいがちょうどいいと思うよ。ちなみに今のボクは魔法については魔王より上かも。」

えっへん」

腰に手を当てて胸をそらすメアリー

「理不尽だ・・・」

ひたすら落ち込むシンイチであった。

魔王城が道具袋に入れられて数日

「ふざけるな！！！！ただのポーションが20アルだと？普段の100倍じゃねえか！！！！」

一人の若い魔族が魔王城内のショップエリアの店員にくっついてかかる。

「当然なんだよ。仕入れも見込めない以上、値上がりは当然だ。嫌なら買わないでくれ」

中年の魔族の店主が出てきて言う。

「貴様！！俺を誰だと思っっている。16将の一人、マルドーク様直属の兵だぞ！！」

「だからどうした？魔王様が死んで次の後継者も決まらない。こんな世界に閉じ込められて何日もたっていて、食料も水も天井しらず

の値上がりだ！！！。信用できるのは金だけなんだよ！！」

「き・きさま。それでも魔族か」

「魔族だろうが人間だろうがメシを食わないと生きていけないんだよ。いいから帰ってくれ」

「よくわかった。殺してやる！！！」

剣を振り回す魔族

「おい。後ろに並んでいる奴等、こいつを殺してくれた奴に特別にケセルの実を10アルで売ってやるぞ」

「な・なに？ぐわ！！」

若い魔族はすぐ後ろに並んでいる魔族に殺された。

もともと、魔王城に常駐していたのは500人程度だった。その程度であれば、少々籠城しても食料も充分にあった。

しかし、人間の国の侵攻のために数千人の軍隊を呼び寄せた状態で閉じこめられたので、あつという間に食料不足になった。

それより深刻なのは水不足だった。

井戸は地下水脈につながっていないとすぐに枯れてしまう。

数千人の魔族の需要を満たす事はできなかった。

ウンディーネをはじめとする水の魔法の使い手が必死に空中から水を取り出そうとしているが、そうすれば当然空気が乾いてのどが渴くのが早まる。悪循環であった。

魔族同志の間でも争いが起き始めていた。

思惑

イフリートが滞在している西の塔

「・・・やはり、その方法しかないか・・・」イフリート

「・・・はい。他の三人の魔公と、16魔将と、兵士1000人を殺して魔法玉を集めれば、計算上は魔王様の魔力を上回ります。その魔力をイフリート様が吸収し、魔力砲でこの道具袋の世界を破れば・・・」

「まだ決断の時は早いが、わが配下を充分に掌握しておいてくれ」

「はっ」部下が下がる。

「・・・果たして、うまくいくだろうか？うまくいっても同族殺しの上、魔族の力が大幅に低下してしまい、人間に滅ぼされるかも・・・」

イフリートは苦悩する。

ウンディーネが滞在している東の塔

「ウンディーネさま。言われるままに金貨を集めましたけど・・・どうされるのですか？他の魔公に知られたら・・・」

部下に命じて、魔王城の財貨保管室から金貨を集めたウンディーネ。「誤解を招く行為であることは承知しています。しかし、どうしても必要なのです」

集めた金貨を魔力で融合させ、一枚の純金の板を作る。

「もう我々には勝ち目はない。この上は、勇者の慈悲にすぎるしかない。我々四大魔公や十六魔将の命を引き換えにしても、魔族を救わねば・・・」

黄金の板に勇者に対しての手紙を掘り込んでいく。

「どうしてわざわざその様なことをするのです？」部下が聞く

「勇者に手紙を出そうとしても、そのままでは取り出してくれないでしょう。だから、勇者が『金銀財宝』を出そうとする時に、この金で出来た手紙も取り出してくれるはずですよ」

「そこまでして・・・」

「我々には他に方法はないのです。」
「ウンディーネはため息をついた。」

ノームが滞在している北の塔

「なんですと！！！！この世界に永住すると????」ノームの執事が叫ぶ

「永住とは言っておらん。脱出できる魔法を開発するまで、ここで生きていくしか方法がない」ノーム

「し、しかしどうするのです。食料も水も空気もエネルギーもないですよ！！」

「あるではないか・・・」

「まさか」

「我等四大魔王は精霊を先祖に持つものたち。精霊とは世界を司る力だ。我が大地に根を張り、生きるに足る果実を実らす大樹に姿を変え、ウンディーネ殿が清らかな泉に姿を変え、シルフィード殿が世界を浄化する風に姿を変え、イフリート殿が天空にて光を照らす太陽に姿を変えれば、このような無の世界でも魔族は生きていけるだろう。もちろん、一族の者も相当数我等と共に姿を変えねばならんが、生き残った魔族がいつの日か世界に帰る魔法を開発できれば・・・」

「お館様」

「すまん。お前達も樹に姿を変えてもらわねばならん。無様な私を許してくれ」

「いいえ。魔族のために身をささげましょう」

中央の塔に滞在する16魔将

「いいか。なんとしても他の魔族を滅ぼして、魔法玉を集めるのだ

!!」ケルビム

「はっ」他の15将

「イフリートはもしや同じことを考えているのかもしれない。よく警戒して、先手を取れ」

魔王城の中では緊張が高まっていった。

シルフィールドが滞在する南の塔

「キヤハハ。皆いろいろな事かんがえているね」

余裕たつぶりの表情で言うシルフィールド

「ふふ。風の末裔たる我等には水も食料も不要。あわてる姿が楽しいですね」

妖精のような少女が言う。彼女もシルフィールドと同じ容姿をしていた。

魔族のうち、風の末裔といわれるシルフィールドの一族だけは他と違い、肉体を持たないガス状生命体だった。

もつとも精霊らしさを残しているということでもある。

その種族特性ゆえに、個体という概念を持たない。すべて『シルフィールド』という存在の分身だった。

「まあ、私達にとって、ここから出ることもなんてたやすいけどね。何回も『外の私』につながったし」

「勇者が何か物を取り出すたびに空気がつながりますからね。情報交換もできますし」

「しかし、こんな形で魔国の滅亡が現実化するとはね。予想も付かなかったよ。面白い」

「ええ。2000年前でしたかねえ。魔族が奴隷化されていた時代は」

「奴隷から解放して新しい世を作るんだーって言うあの子にほだされて協力しちゃったけどね」

「魔国を建国した初代魔王ですね。でも、結局は人間を奴隷にしたりしているんだから、同じでしたね」

「あの時は人間の帝国が滅ぶ様が面白かったから手を貸したけど、結局ずるずるそのまま協力しちゃったね」

「ふふ。私達は魔国が滅びる姿もみたかったんですよ。『風と滅びのシルフィード』ですもの」

「あはは。じゃ、次は勇者君たちに協力しようか。勇者君たちが、今の社会を滅亡させるように。その後にくる新しい世をみたいしね。無力なくせに最強の勇者君はどんな世をつくってくれるんだろう」

「そうですね。それじゃ、勇者君のところに行ってきました」

「たのんだよ」

妖精のシルフィードは消えた。

宝物

旅をして数日。メアリーはすっかり道具袋に味をしめていた。

「んふふ、今その道具袋は本当に宝の袋だね。もっと試してみようよ」

「どうすればいいかな？」

「うん。例えば、値段の高い物でるとか？」メアリー

「身も蓋もない条件だね。んじゃ、取り出してみようか」

シンイチは例のごとく道具袋に手を突っ込んで、どんどんと取り出す

「うはつ。『炎の剣』『霧の羽衣』『地魔の槌』『天空の風石』その他のいっぱい・・・素敵!!!!」

目をハートマークにしてはしゃぐメアリー

「でも、俺には装備できないのね・・・」シンイチ

『炎の剣』をひとつとしたら、熱くてもてなかった。

『土魔の槌』をひとつとしたが、重くてもてなかった。

『霧の羽衣』は女物だった・・・

「この『天空の風石』は使うのに魔力が必要みたいだしね」

ペンダントになっている『天空の風石』を首にかけてメアリーが言う。

「もういいや。どうせ俺なんて・・・」

魔王城

宝物を取り上げられた持ち主が大騒ぎしていた。

「・・・まさか、着ている服まで取り上げられるとは・・・ひどい。しくしく」

下着姿になったウンディーネは泣いていた。

外

「うーん。この『霧の羽衣』さわり心地バツチリ。最高！！そうだ、今の服何日も着てて気持ち悪いから着替えよう。えっと、シンイチ。下着も出してね」

「し、下着??」

「だってナムールの街までまだ遠いし・・・お願い」

「わかつたよ」

「もちろんきれいな下着だよ」

「・・・綺麗な女物の下着・・・でろ!!」

道具袋に触れた物を掴んで出す

「・・・えっちなだね。こんなの着れないよ!!というかサイズが合わない」

「・・・」

取り出したのはセクシーな大人用の下着だった。当然、胸のサイズが大きすぎる

「なんでこんなのだしたのカナ??ボクの胸に対するあてつけ?」
黒いオーラをまとうメアリ!。

「ち、違うよ。『綺麗な下着』なんていうから、こんなゴージャスな下着が出たんだよ」

「バカ!!新品の下着っていう意味だよ!!」

「し、ごめんなさい」

魔王城

「しくしく・・・なんで私ばかり・・・もう勘弁してくださいよ
う・・・」

素っ裸で泣くウンディーネ。

外

「でも、使い方がわからないと不便だよ。この『天空の風石』ってどう使うんだろう?」

「ああ、それはね。空を飛べるアイテムだよ。私の物だけど、あげるよ」澄んだ声がする

「え?すごいじゃん。・・・てか、キミだれ?」

いつの間にか、目の前に小さい妖精が浮かんでいた。

「初めましてだね。キミが魔王の後継者?そしてそっちの拗ねてるキミが勇者君?」

「えっと・・・?」

「あ、ごめん。私は四大魔王の一人シルフィードの分身。シルフと呼んでね」

「「えええええ???」」シンイチとメアリーが声をあげる。

「あはは。そんなにびっくりしなくてもいいよ」シルフが笑う

「ど、どうやって道具袋から出たんだ!!!」

「ああ、魔法袋の物を取り出すときに中とつながるでしょ。その時に一緒に出たの。空気を扱う私しかできないけどね」

「ボ、ボクたちに仕返しするの?ボクは強くなったんだぞ!!!」
女神の杖を振り回しながらメアリーが言う。

「あはは。そんなに警戒しなくても。私はね、今度から勇者君のお供をする事になったんだよ、よろしく」

「「え???」」

「これから私は役に立つとおもっよ」。
「にっこり笑うシルフ」

「なるほど。魔王城のシルフィールドは、魔国に対してもう愛想が尽きているわけなんだ」シンイチ

「うん。せっかく魔族の国を作って何か別の社会を作るのかなとおもったら、結局人間と同じなんだもの。戦争と支配ばかり。自分達は奴隷はいやだ〜なんていつておいて、人間捕まえて奴隷にするとか。そんなの同じじゃん。もう協力するのも潮時かなとおもって。そろそろ滅んでもらって、新しい事を始めて欲しいんだよ。」

「・・・でも、キミは風と滅びのシルフィールドなんですよ？一緒にいたらボクたちも滅ぼされるんじゃないの？」

「興亡一体だよ。作った国はいつか滅ぶべきなんだ。私達『風』は何億年もこの世界を見てきた歴史の生き証人なんだよ。『風化』という言葉があるように、万物は滅びる。それは、次に新しいものを生むために必要な事なんだよ。正しくは『風と滅びと新生のシルフィールド』と呼んでもらいたいね。私は期待しているんだ。勇者君と魔王ちゃんがこの世界で新しい何かを作り出す事をね。それが古くなって硬直化するまでは滅ぼさないよ」

「・・・まあ、今すぐ俺たちに危害を加えないなら、一緒に来てもいいんじゃない。小さいし、危険なさそうだし」

「そうだね。まあいいか」

「決まりだね。楽しい旅になりそうだよ」
旅の仲間にシルフが加わった。

「それじゃ、空を飛んでナムールの街までいこうか。」
「え？」

メアリーがシンイチの手を取る。すると、二人が浮き上がった。

「ち、ちよつとまって。怖い怖い」シンイチ

「あはは。気持ちいい」メアリー

「そうでしょ。風になって世界を巡るのって気持ちいいんだよ」シ

ルフ

一行はナムールの街まで飛んでいった。

各国

フリージア皇国

「ふふふ。うまくいったようだな」国王。

「ええ、これが魔王からいただいた『呪力条約紙』です」

アーシャが取り出して渡す

「ふむ・・・なに!!!!!!どういうことだ?」

「何か?」

「魔王の署名はあるが、血判が消えておる。これでは条約が発効しないぞ!!!!!!」

「なんですと!!!」

アーシャが見ると、確かに押されていた血判が消えていた。

「もしや、謀られたのでは??」

宰相が震える声で言う。

「い・・・いや、この呪力条約紙は本物です。私達のこめた魔力も残っています。しかし、私達の血判も消えています」メルト

「確かに・・・我等の署名した条約紙だ。両方の血判が消えているという事は・・・」国王

「魔王に何かあったということ。もしや、あの勇者が魔王を倒したのでは??」ノーマン

「そんな、ありえない」メルト

「ええい!!!!!!なぜ勇者が魔王に殺され儀式が終了するところまで見届けなかったのだ!!!」国王

「も・・・申し訳ありません」アーシャが頭を下げる。

「とにかく、この事が他国に洩れたら・・・」

「い、いや。元々魔王を倒すためという名目だったはず。だから目

的が達成されたということ・・・」宰相

「馬鹿者！！魔王が倒されたとして、次の魔王が攻めてきたらどうする。わが国の魔国との平和条約すら魔王の死で失効するのだぞ！他国も魔族の攻撃がおさまらないと、我が国に対して不信感を持つ。最悪、魔国と他国連合で挟み撃ちになるぞ！！」

「そんな・・・」

「緊急会議じゃ！！」

急遽国内の貴族が集められ、会議が開かれる事になった。

数日後

森の国ミール

「ええい。フリージア皇国からの使者はまだか？」

ミール王が声を荒げる。

「まだ魔国から帰って数日です。そんなに早く使者はこないのでは？」王子が諫める。

「何を生ぬるい事を言っておる。魔王が倒されたのなら魔族がコロニーから撤収してもよいはずじゃ。最悪、勇者が死んだ場合でもコロニーから魔族が出ないように条約を結ぶとフリージア国王は約束したはず。しかし、未だ魔族は暴れまわっており、略奪や誘拐が横行しておる。100万アルの大金と森の杖を提供させておきながら、今までと変わらないではすまさんぞ！！」

「・・・使者をこちらから出されてみれば？」王子

「そうじゃな。光の国ミラー、海の国アトルチス、大地の国ガイルとも提携して詰問状を出そう。場合によっては、連合してフリージア皇国を討つ」

「ち・・・父上、戦争をするのですか？」

「場合によってはじゃ。資金を国債で提供してよかった。踏み倒し

てでもあの国に一泡ふかせてやる。戦争に勝てばただの紙切れじやからの」

人間の国にも不穏な雰囲気の流れだした。

各国の間で使者が行き交い、どの国も今までと状況が変わらない事が確認され、フリージア皇国に使者団が派遣された。

「貴国は約束したはず。最悪の場合でも魔族の暴虐はおさまるはずと」森の国の代表

「は・・・しかし」フリージア国宰相。中年太りの体は汗でぐっしょりと濡れている

「しかしではない。我等が国の魔族コロニーはむしろ拡大しておる。どうということなのかな？」光の国代表

「まず、魔国とどういった話し合いだったのだ。魔王と勇者パーティで勝負を決めると説明され、魔王が勝った場合は魔族コロニーの自治権の認証。そして、勇者が勝った場合は魔族コロニーの撤退。

そして、どちらにしても貴国が今後魔国に対しての盾となるといった取り決めだったはずだ」海の国代表

「もしや・・・我等に何か隠している事でもあるのかな？とりあえず、魔国との間に結ばれた呪力条約紙を見せていただこう」大地の国の代表

「いや・・・今は手元には」宰相

「我等を愚弄するか???ならば我等にも考えがある。貴国に差し出した国債証書は無効にする。そして、我等は連合して宣戦布告をさせていただこう」大地の国の代表者が最終通告をつきつける。

「わかりました・・・」観念して、呪力条約紙を見せるフリージア宰相。

「これは・何という事だ。最初から勇者が勝つ事は考えられてお
らぬ内容ではないか!!!」森の国使者

「魔王に勇者を生贄として道具袋を渡す。フリージア皇国には平和
条約の継続。そして魔族コロニーの自治化のみで、勇者が勝った場
合の撤退など何処にも盛り込まれておらぬ!!!」海の国使者

「ひどい内容だ・勇者と人質を生贄にして差し出して平和をもた
らそうなどと。」光の国の代表

「・・・貴国に魔国との交渉をすべて任せていた我等が愚かだった。
一定の約定が結ばれば、徐々に奴隷とされた者たちの解放も交渉
すると貴国はいつていたが、平気で王族を奴隷に差し出す国がその
様な事をするはずもない」大地の国の代表。

「・・・」フリージア宰相は無言

みな、それぞれの代表にも、魔族の攻撃で死んだ知り合いや、奴隷
として連れて行かれた親族がいた。

「・・・それで、結果はどうなったのだ。いや、この呪力条約紙の
状態を見れば、予測が付くがな」森の国の代表

「わ・我等も予想外の結果なのです。あの情弱な勇者がどんな卑
怯な方法を使つて、魔王陛下を害したのやら・・・」
宰相が焦つて言う

「情弱だと!!!」

「・・・卑怯だと!!!」

各国代表が怒気を募らせる。

「・・・情弱で卑怯なのは貴国だ。勇者ではない。わが国は勇者が帰
還したら、最大級の敬意をもってもてなす。我等が救世主としてな
森の国の代表

他の国の代表も頷く。

「・・・我等は大使として、勇者帰還まで滞在させていただく。もし勇者に仇なす時は、我等がすべてを敵に回すと心得よ。それから、貴国に差し出した国債証書と国宝は返還していただこう。あれは『勇者』に対して差し出した物であって、貴国に対して出したものではない」

「・・・はい」フリージア国宰相はがっくりと肩を落とした。

金貨

ナムールの街に着いたシンイチたち。夕方になっていた。

「やれやれ。これで今日から野宿しなくて済むね。とりあえず、お腹すいたから食べようよ」メアリー

「ああ。しかし賑やかだなあ。」

街は相変わらず多くの種族で賑わっていた。

料理屋を探して街をあるく。

「ねえねえ、あそこがおいしそうだよ」メアリーが指をさす。立派な建物で、高級そうな料理店だった。

「ちよつと高級すぎないかな？」

「いいじゃん。どうせお金なら魔王城から出せばいいし」

ポンポンと道具袋を叩いて言うメアリー。

「とりあえず出して見ようか。1アル出て来い」シンイチが道具袋から1アル金貨を出す。

「うん。問題ないね。それだけあれば足りるはずだよ」メアリー。

「私は食べる必要はないけど、いい匂いを嗅ぎたいわね。それが私の力になるんだよ」シルフ

「そっか。ならここでいいか」

三人で中に入っていた。

「ふー。満足」シンイチ

「おいしかったね」

高級な肉料理、魚料理、フルーツのデザートまできれいに食べた。

「そういえば、通貨の単位ってどうなっているの？」シンイチ

「アルが金貨で、その1/10の価値がギル銀貨。さらにその1/10の価値がシル銅貨。」

「一般の人の収入は？」

「んー？平民の一般的な家庭で30アルくらいかな？」

「だいたい1アルが一万円で、1ギルが1000円、1ジルが100円くらいか・・・」

「今食べた料理が二人で9ギル5ジルだね。」

「そんなもんか。・・・そういえば、その『女神の杖』って100万アルって言うってたっけ？」

「そうだよ。この世に一つしかない伝説の杖だもん。でも、その袋の中にはそんなのゴロゴロ入っているんだけどね。ボクが着ている『霧の羽衣』と『天空の風石』もそれ位するし。そう考えたらボクたちってすごいよね！！」

「すごいというか・・・メアリー300億円ぶら下げて歩いている事になるの？」

「キャハハ。もしバレたらこの街中の人に追っかけられるかもね」
シルフ

「・・・今日はもう服屋とか閉まっているから仕方ないけど、明日街をまわって必要なものを買おう。メアリーは街中でその服を着るの禁止！杖も風石もなるべく道具袋にしまっておこう」
シンイチが言う。

「えー。この服気に入っているのに」メアリーが膨れる。

「国宝ぶら下げて街を歩いていたら命がいくつあっても足りないよ！！」

「その時は皆ぶっ飛ばしちゃえば？」メアリー

「そうだそうだ！！！私も協力するよ」シルフ

「ダメだ・・・メアリー魔王になりつつあるよ」

シンイチは頭を抱え込んだ。

料理店を出た後、街で一番大きな宿に泊まった。

「うわ・・・ふかふかベッド。王宮みたいな豪華な部屋だね」メアリーがはしゃぐ

「・・・なぜに同室。しかもスイートルーム」
部屋の中央には大きなベッドがあった。

「ねえねえシンイチ。この部屋おっきなお風呂も付いているよ。ボク入ってくる」

さっさとバスルームに行くメアリー。

「・・・無防備すぎるよ。まあ、子供だから仕方ないか」とか無意味に冷静さを装うシンイチだった。

「・・・覗く？」シルフ

「・・・子供には興味ありませんですハイ」シンイチ

「なぜか体温あがっているけどね」シルフがからかう。

「ねえシンイチ。また新しい下着出して持ってきてね」バスルームからメアリーが呼びかける。

「あ、また体温が上がった」

シンイチは無表情に新品の下着を出してバスルームに投げ入れた。

交代で風呂に入って、落ち着いた二人。

「ねえ、そういえば、魔王城の中にお金っていくらあるんだろう？」メアリー

「そうだな。確認しておこう。アル全額でろー！」

とたんに、部屋中が金貨で埋まった。

魔王城内 酒場

「クツ・・・金が儲かるのはいいが、それ以上に酒が高くなるのはな」
魔王城内の店舗エリアの道具屋店主。

「まあ、お偉方がどうにかしてくれるだろうぜ。俺らに出来るのは

「儲けることだけだぜ」

武器屋の店主が言う。イフリート派、ケルビム派両方から飛ぶように武器が売れていた。

「だがなあ。もうそろそろ品物がなくなつて来てるんだ。はやくどうにかしてくれないと。ま、儲かるからいいけどな」

防具屋の店主がぼやく。

なんだかんだといいながら、彼らはこの特需を喜んでいた。

「兄ちゃん。勘定だ。いくらだ？」

「50アルになります」酒屋のアルバイト魔族

「けっ。いい値段してやがるぜ。ほらよ・・なに??？」

道具屋の店主が財布を開いて驚愕する。パンパンに膨れていたはずの財布から、金貨が消えていた。

「ど、どういふことだ!!!」

武器屋と防具屋の店主も財布を開いて驚く。綺麗さっぱり金貨が消えていた。

「店長・・大変です。金が消えています!!!」

酒屋のアルバイト店員も異変に気がついて騒ぐ。

「い・・一体何が起きているんだ。これ以上何が起こるんだ」
魔王城の中は大騒ぎになっていた。

「え???メアリーどこ????」

焦ってメアリーを探す。

「んー。この辺に埋もれているみたい」シルフ
あわててメアリーを掘り起こす。

「・・ぶはっ 危うく金貨に埋もれて死ぬとこだったよ」メアリー。
。

「・・そういえば、最初に召喚された時もアルを出したら部屋中金

貨だらけになっただけ。」

「金貨だらけどころじゃないよね。この広い部屋半分埋もれているもん」

「・・・こんなにいらなないなあ。なくなったらまた出せばいいし」
「シ
ンイチ。金貨を一つかみ取る。」

「そうだね」
「メアリーも両手におさまるぐらい金貨をとる。」

「それじゃ『収納』」
「金貨を収納した。」

魔王城

「うひゃひゃ。金貨が降ってきているぜ!」

魔王城の庭に金貨がどンドン降ってきていた。
兵士が必死に拾い集める。

「ま、まさか、あれって俺たちの金貨じゃ?」

いきなり今まで貯めていた金貨がなくなって呆然としていた商人達
が、我勝ちに金貨を回収しようとする。

庭では魔族同士の醜い争いが起きていた。

その様子を見て大笑いするシルフィールド

渋い顔をしているウンディーネとノーム。

殺気だっているイフリートとケルビム。

「もう限界です。何とかしないと秩序を保つことすらできません!

!」
「ウンディーネが叫ぶ。」

シルフィールド以外の魔王たちも同じ思いだった。

皇国

フリージア皇国城

数日前から国中の貴族を集めて対策会議をしているが、前向きな意見は出てこなかった。

「そもそも、このような卑怯な策をすべきではなかったのだ。勇者に対して誠実に接して、魔王を倒す事を目的とおれば、今頃は我等が魔国を征服することも可能だったはず」

「そもそも、このような策を立案したメルト王女に責任がある。」

「何を言うか！！勇者があのような情弱でさえなければ、我等も勇者に対して違った接し方があった。このような結果など誰も予想できん」

「現に魔王は倒されたではないか！！」

「そもそも、勇者が倒したとは疑わしい。あの人質となったメアリとかいう平民の子が倒したのでは？」

「勇者が倒したと考えるよりは可能性があるが・・・」

「誰も彼女に説得しなかったのか！！人質として役目をはたせと・・・」

「いや、そもそも。勇者の残した伝説の武器や防具があるなら、ア
ーシャ殿やノーマン殿が勇者と協力してれば充分勝算があったはず、

始めからそうしておれば、周辺諸国の信頼も勝ち得たものを・・・これでは、わが国のみが周囲から孤立するぞ!!!」

「まず魔国の情勢を探るべきでは・・・」

「いや、こちらから先手を取って周辺国に攻め込むべきだ!!各国の国宝を返還したとしても、前勇者の装備があれば充分勝算はある」

「・・・それよりも、勇者や人質に対して手を打つべきでは?どちらが魔王を倒したにしても、間違いなく怒り狂って復讐に来るぞ」

「だが、勇者に対して手を出すと、周辺諸国が宣戦布告をしてくる・・・」

「勇者とメアリー王女に対して謝罪して・・・」

「いや、先手を取って・・・」

「そもそも、我等に相談もなく国宝や国債を返還した弱腰な宰相殿にも責任が・・・」

「勇者達が怒っているのは、裏切りをしたメアリー王女や勇者パーティに対してだろう、責任を取ってもらおうではないか」

議論百出。小田原評定。

誰もが不完全な情報を元に憶測で意見を言う。

国王や宰相、メルト、アーシャ、ノーマンもいい考えが思いつかない。

それぐらい勇者が魔王を倒すという事は予想外であった。

誰もが自分達に責任が向かないよう必死に誰かに責任をなすりつけ

ようとしていた。

会議がまとまらないまま、何日にも及んでいた。

フリージア城のテラス

「・・・メルト王女様。お疲れの様子」アーシャが声をかける

「いえ、アーシャ様こそおやつれになって・・・なんとおいたわしい。これというのも、あの憎き勇者が余計な事をしでかしたから」メルト二人とも連日の会議で責任を追求され、疲れきっていた。

「ああ、計画どつり勇者が殺されていれば、世界に平和が訪れ、愛しいアーシャ様と結ばれていたのに。そして、いずれは二人でこの国の王位を継ぐ事も出来たはず・・・」メルト

「・・・私はまだ貴方を諦めてはおりませぬ。我が愛しの姫。貴方こそ女王にふさわしい。第一王子は言うにおよばず、第二王女、第三王女も国のことなど考えもせず日々遊び暮らすのみ。この国のためには、どうしても貴方が女王になるべきなのです」

「アーシャ様・・・」

絶世の美少女と美男子は、物語の主人公のように口付けを交わした。

フリージア城 教会

「ふむ。勇者が魔王を倒すとは、予想外じゃったの」
しわがれた声が言う

「悪いことばかりではありませんね。人類にとっての悪が滅びたという事ですから。マリコル大神官」

ノーマンが声を返す。

彼らは大陸全土に根をはる宗教団体「光の聖霊教」の神官だった。

「じゃがの、魔族の脅威があつてこそ、我が教えも光を帯びるのじや。民草は一時的には勇者を崇め聖霊を尊ぶが、魔族の脅威がなくなれば神を信じなくなる」

「・・・つまり、魔王を倒した勇者は邪魔だということですね」

「そういふことじゃ」

「・わかりました。勇者を堕ちた偶像にすべく、探りましょう」

「頼むぞ。わが子よ」

盗難

ナムール街

「うーん。よく寝た」起きて体を伸ばすメアリー

「・・・あんまり寝られなかった・・・」シンイチ。目の下に隈が出て来ている

「あれ？ベッドが堅かった？ボクには気持ちよかったけど・・・」
「・・・そうじゃなくて・・・」

スイートルームにはなぜかベッドが一つしかなく、二人で寝たのである。

メアリーは子供っぽいのが、14歳の女の子である。ついでに言えば、可愛い。

「あはは。シンイチくん、男の子だね」
シルフがからかう。

メアリーはわかってなくて首をかしげた。

「よし。今日は買い物だ！！」

「その前に、『霧の羽衣』と『女神の杖』と『天空の風石』は道具袋に入れるよ。持って歩いたら危ないから」

「えゝ。でも、ボクの着ていた服は洗濯してないし・・・」

「道具袋から適当に取り出すよ。改めて街で気に入った服を買えばいいし。えっと、メアリーに似合いそうな服でろ」

シンイチは念じて取り出す。

「・・・メイド服？ボクにこれ着て欲しいの？」メアリー

「どうしてこうなった？」

「あはは、潜在意識に作用したんじゃないの？それがシンイチ君の

趣味か」

「ち・ちがう・・と思いたい」シンイチ。

「まあ可愛いからいいけどね。着替えてくるよ」バスルームに行く
メアリー

「あれ？また体温が上がっている。期待でウキウキワクワク？」シ
ルフ

「・・・ノーコメント」

「でもね、魔王城じゃ多分一人メイドさんがひん剥かれているとお
もうよ」

「・・・あつ」

「どうして私まで・・」魔王城の廊下でウンディーネの侍女が泣い
ていた。

ポケットに金貨を入れて、ナムールの街を歩く三人

「あ、これいい。この服も可愛い。これも」

「はいはい」

メイド服を着たメアリーがどんどん買い込む。

シンイチは必死になってついていった。

（はあ・・なんか本当に勇者じゃなくて荷物もちのような気がして
きた。まあ、道具袋があるおかげで、荷物が重くならないで助かる
けど）

「あはは。シンイチ。この香水いい匂い。これも買って」シルフ
女性二人の買い物にかける熱意に圧倒されていた。

「ね・・ねえ、そろそろ休もうよ」

「まだダメ」

何時間も市場を連れまわされて、疲れきった様子
のシンイチ。二人に付いていこうとするが、つい引き離されていた。

「あつ！！！！！」

その時、いきなりシンイチが持っていた道具袋がひつたくられた。

「待て！！！！！」

シンイチは必死に追いかける。道具袋を取られたら破滅である。

「え？」 「どうしたの？」

遠くで二人の声があるが、構わず追いかける。

盗人は裏通りに入っていた

「待て！！！！ハアハア」

息が切れそうになるが、必死に追いかける。

すると、盗人が立ち止まった。犬耳と尻尾がついている小さい少女のようである。

「ハアハア・・・お嬢ちゃん。もう逃げられないよ・・・おとなしく・・・グッ」

少女に近寄ると、いきなり後頭部に衝撃がきた。後ろから棒で殴られて昏倒するシンイチ。

「アンリ。よくやったぜ。こいつら結構高いもの買いまくっていたから、いい稼ぎになるぜ」

筋骨隆々とした男たちが数人出てきて、道具袋を探る。

「なんだこれ？開かないぞ。でも、触ってみたら何も入っていないみたいじゃねえか！！！！アンリ、失敗したな！！」 道具袋を投げ捨てる

「そ、そんな。あたしは確かにその袋に物を入れたのを見たんだよ。」

「うるせえ。役立たずが。もういい。そこの男と一緒に、お前も今日限り売り飛ばしてやる！！」

「や、やめて。奴隷にするのだけはやめて。何でもして借金返すから・・・」

「やかましい！！」男たちに縛り上げられるシンイチとアンリと呼ばれた少女。

そのまま袋をかぶせられ、連れて行かれた。

「シルフ、確かにシンイチはこの辺に来たの？」

「うん。シンイチの汗のにおいがこの辺に漂っているから」

メアリーとシルフは見失ったシンイチを追いかけて裏通りに来ていた。

「ここだよ。ここで倒れたみたい。地面に汗が染み付いている」

「・・・でも、シンイチいないよ？。あつ　これは」

地面に道具袋だけが落ちていた。

「ど・・・どうしよう。シンイチが行方不明になっちゃったよ・・・」
呆然とする二人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3978x/>

反逆の勇者と道具袋

2011年10月19日08時19分発行